

人 来 遺 跡

河 川 貞 徳

図 版 目 次

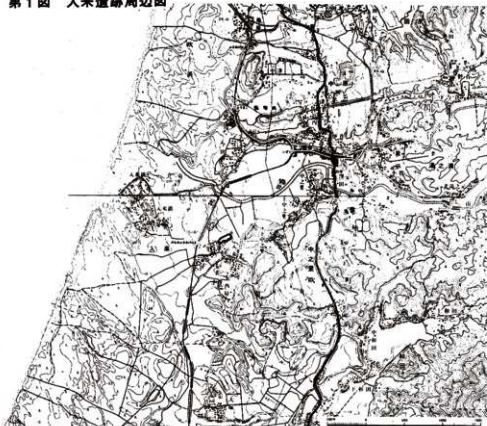
図版 1	Aトレンチ及びV字溝	2	図版 24	U字溝・土器	108
図版 2	V字溝	86	図版 25	V字溝末端・石製円盤・須恵器	109
図版 3	V字溝	87	図版 26	U字溝	110
図版 4	V字溝	88	図版 27	Rトレンチ・V字溝北端	111
図版 5	V字溝	89	図版 28	遺跡より東方を望む・遠景	112
図版 6	V字溝	90	図版 29	東北地区の破壊と西南地区	113
図版 7	V字溝	91	図版 30	縄文式土器	114
図版 8	V字溝鉢形土器	92	図版 31	石器	115
図版 9	V字溝壺形土器	93	図版 32	石器	116
図版 10	軽石輪・脚台付土器	94	図版 33	砥石・叩石	117
図版 11	V字溝	95	図版 34	軽石製品	118
図版 12	V字溝・軽石加工品	96	図版 35	軽石製岩偶と垂飾	119
図版 13	住居址・木の実	97	図版 36	特殊石器・砥石・石鏃	120
図版 14	V字溝木の実	98	図版 37	連点文土器・結縄凸帯土器	121
図版 15	貯蔵穴・出土土器	99	図版 38	結縄凸帯土器と三角凸帯土器	122
図版 16	貯蔵穴	100	図版 39	三角凸帯土器	123
図版 17	6号住居址・埋鉢	101	図版 40	壺・釜・甑	124
図版 18	6号住居址全景・炉址	102	図版 41	壺形土器	125
図版 19	住居址と貯蔵穴	103	図版 42	壺形土器	126
図版 20	住居址と貯蔵穴	104	図版 43	壺・甕・鉢	127
図版 21	6号・5号住居址	105	図版 44	壺・釜・脚台・鉢	128
図版 22	住居址群とV字溝	106	図版 45	須恵器・壺についた木の実	129
図版 23	9号住居址とV字溝	107	図版 46	土器と木の实	130

挿 図 目 次

第 1 図	入来遺跡周辺図	7	第 22 図	入来遺跡出土甕・鉢・蓋形土器図	50
第 2 図	入来遺跡調査地点図	10	第 28 図	入来遺跡 8 号貯蔵穴出土土器図	52
第 3 図	入来遺跡東南地区図	19	第 24 図	入来遺跡出土甕・陶台付土器図	54
第 4 図	入来遺跡 A・C トレンチ図	20	第 25 図	入来遺跡出土甕・蓋形土器図	55
第 5 図	入来遺跡東北地区図	23~24	第 26 図	入来遺跡出土結縄凸帯土器他図	57
第 6 図	入来遺跡 G.0~G.Ⅲ V 字溝図	25	第 27 図	入来遺跡西南地・他出土土器図	58
第 7 図	入来遺跡 G.Ⅳ~G.Ⅴ V 字溝図	27	第 28 図	入来遺跡住居址・他出土土器図	60
第 8 図	入来遺跡 G.Ⅵ~G.Ⅶ V 字溝図	29	第 29 図	入来遺跡 6 号住居址出土土器図	61
第 9 図	入来遺跡 G.X~G.ⅩⅤ V 字溝図	31	第 30 図	入来遺跡住居址出土須恵器図	64
第 10 図	入来遺跡 G.ⅩⅥ~G.ⅩⅦ V 字溝図	32	第 31 図	入来遺跡出土縄文式土器図	66
第 11 図	入来遺跡住居址と貯蔵穴図	36~37	第 32 図	入来遺跡出土縄文式土器拓影	67
第 12 図	入来遺跡 5 号住居址図	39	第 33 図	入来遺跡出土挾入石斧図	69
第 13 図	入来遺跡 6 号住居址図	41	第 34 図	入来遺跡出土石庖丁・他図	70
第 14 図	入来遺跡 9 号住居址図	42	第 35 図	入来遺跡出土磨製石斧・他図	72
第 15 図	入来遺跡 G.ⅩⅧ~G.ⅩⅨ V 字溝図	28	第 36 図	入来遺跡出土打製石斧図	74
第 16 図	入来遺跡 X・Y 溝図	34	第 37 図	入来遺跡出土石器他図	76
第 17 図	入来遺跡西南地区図	44	第 38 図	入来遺跡出土石器図	77
第 18 図	入来遺跡西南地区 トレンチ平面・ 断面図	45	第 39 図	入来遺跡出土土鉄図	78
第 19 図	入来遺跡西南地区 トレンチ図	46	第 40 図	入来遺跡出土軽石製品図	80
第 20 図	入来遺跡西南地壁面図	47	第 41 図	入来遺跡出土軽石製品図	81
第 21 図	入来遺跡出土壺形土器図	48	第 42 図	入来遺跡出土砥石図	83
			第 43 図	入来遺跡出土砥石・叩石図	84

I 遺跡の発見と調査の経過

第1図 入来遺跡周辺図



鹿児島県日置郡吹上町入来遺跡は、同地に所在する支石墓としてはふるくより知られていた。しかし同遺跡が弥生時代の前期末より後期に亘る大遺跡であることが判明するに至ったきっかけとなったのは、吹上高校社会研究部員の遺跡調査である。吹上高校社会研究部誌「ふきあげ」第6号によると、昭和42年6月7日、商業科2年尾辻高徳・松木明仁・久保園彰人等社会研究部員は入来支石墓実測調査の途次、入来遺跡東北端の台地がブルドーザーにより掘削されて出来た崖面に土器・貝殻を発見した。これが入来遺跡発見の端緒である。（第2・8図 Bトレンチ地点）

更に同月9日には同じく社会研究部員によって、前記発見地点より西方85mの東学氏宅地と関氏宅境界の崖面に多量の土器が露出しているのが発見された。（第2・8図 Aトレンチ南西崖面）

吹上高校社会研究部では前記の調査の他に同月8日、12日、28日、9月28日、2月17日の各日に前記の2地点について調査し遺物の採集を行なっている。

以来1年余を経て、吹上高校社会研究部員当房満也君より入来遺跡について聞知り、昭和44年7月6日、出口浩君を伴い吹上高校社会研究部室を尋ねて入来遺跡出土の遺物を見せてもらい、ついで現地を尋ね状況を調べた結果、東学氏宅地が調査地として適当していることを認めた。

なお関氏・東氏宅地境界の壁面については、上村俊雄君が吹上高校在学中、昭和89年某月某日に土器を発見、採集していたことを、同君より教えられたのでここに記録する。

吹上高校社会研究部員による昭和42年6月9日の関氏宅地裏遺跡の発見については「ふきあげ」第6号に「……関さん宅の裏からも土器破片が出土した。これは花壇においてあった物から発見の糸口をつかんだもので、家の裏の竹やぶがくずれ落ちなかったその竹やぶの根もとに沢山の土器破片がはいていた」とあるところから、上村君の発見とは無関係で、同一遺跡の再発見ということになる。

前記の東学氏所有宅地（吹上町入来427番地、廃屋を有する荒地）を発掘対象に選び、昭和44年7月12日～18日の2日間地層調査を行ない、続いて同年9月18日より発掘を開始した。

本遺跡は、概来空白となっていた南九州の弥生時代中期前期に該当すると思われる遺物を主として出土していたので、この時期の解明を目的として調査に着手したものである。当初調査は短期間に終了する予定であったが、調査地点（第2・8図 Aトレンチ・Bトレンチ）が攪乱層であったために、保存状況の良い地点を求めて調査を継続することとなった。さいわい宅地内は空き屋と雑草の茂る空き地であったので、次々にC・D・E・F（第2・8図）と各トレンチを順次内くまなく設定して調査を実施した。結果としては相当量の遺物を得ることはできたが、保存状態の良い遺物は遂に発見することができなかった。

但しDトレンチは宅地に隣接する台地上の畑地に設定したもので、後期の土器が出土したために中止したが、後にこの畑地からは中期前期の遺構が発見された。

調査対象地の東学氏宅地が殆ど攪乱を受けていることが判明したので、北東に隣接する台地上の畑地（東学氏所有の休耕畑）を調査することとし、Gトレンチを設定して発掘を行なった（第2図・第5図）。これが成功して希望の遺構発見の端緒となり、台地を横断するV字溝に取りついたのである。発掘開始の日より数えて11日目であった。以後は台地上の休耕畑地（東学氏所有）を調査対象とし、遺構の発見につとめた。ここではV字溝・住居址・貯蔵穴等が逐次発見され見るべきものが多かったが、作業は遅々として進まなかった。理由は調査経費が皆無で、研究者や学生の自発的参加によって作業が進められ、平日は自分独りというような調査の連続であり、それも所用の時は中止するという状態であったからである。

調査は昭和44年9月開始以来数ヶ月を経過し、昭和45年を迎えたが、8月に至って突然地主による採土工事が始まり、発掘中の遺構の8分の1を破壊された。直ちに鹿児島県教育委員会文化財係と共に地主に交渉し、採土工事中止を求め了解を得た。同年4月より発掘調査を再開したが、6月中旬に至り、地主は再び採土工事を開始したので、直ちに県教育委員会と、吹上町に連絡し善処を求めた。

県教育委員会と町教育委員会は地主と交渉を始めたが、発掘調査はその間も継続し、7月におよんだ。

この時点での調査結果は、台地を横断する溝状遺構1、袋状円形貯蔵穴1、楕円形竪穴1、方形竪穴住居址10カ所が発見され（第5図）、未発掘地域には大きな集落遺構の埋存が推定された。

10月に至って地主との交渉が妥結し、今回は県の補助を受けて吹上町が発掘主体となり、河口

が調査を担当することになった。驚いた事に、発掘開始直前に、地主は発掘予定地の大半を、今まで出土していた遺構もろともブルドーザーで、地表下1m余りの深さまで削り取ってしまった。この出来事によって調査予定地が消滅したのでやむをえず休耕畑地の西端残存部の発掘を10月14日より19日まで6日間に渡って実施した。現在ではこの地域も採土工事によって消滅している(第2図・図版28-68・図版29-66)。

入来遺跡の調査は昭和44年7月12日に始まり、昭和45年10月19日に一応の終了を見たが、昭和50年8月に至って、遺跡を通過して南吹上駅に通ずる道路の拡幅工事によって、入来遺跡の西南端、文石墓より東方80mの地点にV字溝の断面が発見された(第2図 図版29-66 発見者 本田道輝)。当時は入来遺跡の調査報告作成の準備中であったので、この遺構も報告に加えることとし、昭和50年4月1日より5日まで5日間の発掘調査を行なった。

以上、入来遺跡の発見と調査の経過を述べてきたが、調査の期間から見ると、8次に区分され、地域では東北区和西南区の2地域に亘っている。次に各期の調査参加者を記録して謝意を表すると共に、更に表示して調査の経過を記録する。

第1次調査

調査期間 昭和44年7月12日開始

昭和45年7月17日終了

調査実施日数 94日

調査者 河口貞徳・出口浩・中間研志・有元彰順・大野重昭・林敬二郎・牛山好治・池水寛治・池畑耕二・河口芳子

吹上高校生

当房満也・竹之内芳郎・富田某・宮田道照・久保好実・石田千尋・東辻透・弥動みどり・坂野敬子・藤田芳文・横山秀博・瀬野和美・有馬正己・下原重己・前田孝子・坊野和子・神野鈴子・馬籠千津子・馬籠繁治・上野敏郎・前園宗昭・阿久根某・今村美佐智・井上多美子・馬籠澄幸・宮内ヒデ子・福田いく子・永野悦子
玉竜高校生

藤村清文・生駒光司郎・宮原直樹・八田祐美子・森脇和子・村山和平・北原誠・富山孝子・阿野さと子・今藤由美子・井崎英子・吉国範行・橋元修二・上赤富士夫・外園衣子

調査地域 入来遺跡東北地区

調査面積 814.8㎡

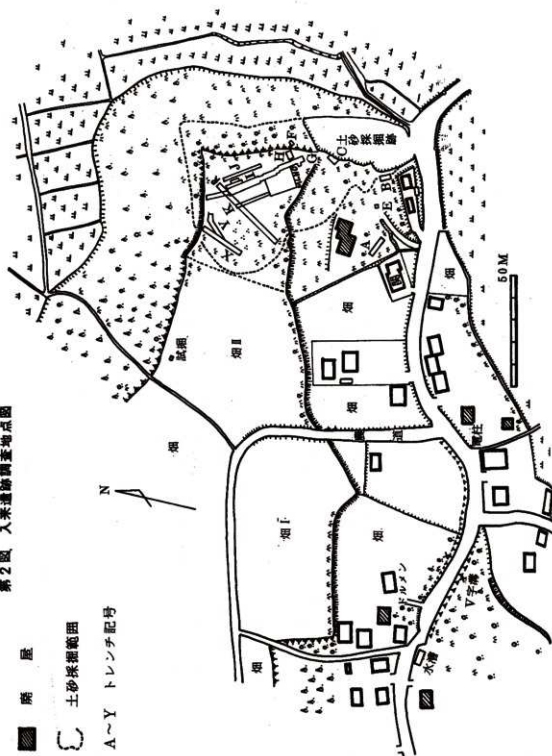
第2次調査

調査期間 昭和45年10月12日開始

昭和45年10月19日終了

調査実施日数 6日

第2圖 入来遺跡調査地点圖



調 査 者 河川貞徳・中間研志・上村俊雄・出口浩・田中重則・竹之内秀郎・馬嶋澄幸
 調査地域 入来遺跡東北地区
 調査面積 154m²

第8次調査

調査期間 昭和50年4月1日開始
 昭和50年4月5日終了

調査実施日数 5日

調 査 者 河川貞徳・本田道輝・旭慶男・多々良友博・平島勇夫・片野坂隆明・前田健渡・
 大迫文敏・有元彰順
 調査面積 4.9m²

第1表 入来遺跡調査表(第1次)

年 月 日曜日	調 査 者	計	事 項	調 査 地 域
44. 7. 12 土	河川・当房 吹上高校生 3	5	地層調査	吹上町入来東学氏宅地
" 13 日	河川・出口・池畑・当房 吹上高校生 3	7	"	"
44. 9. 18 土	河川・中間・牛山 吹上高校生 15	18	発掘調査	Aトレンチ
" 14 日	河川・池水・出口・中間・ 大野 吹上高校生 10	15	"	A・Bトレンチ
" 15 月	河川	1	発掘・実測	A・Bトレンチ
" 16 火	河川	1	発掘	Cトレンチ
" 18 木	河川	1	発掘	CⅠトレンチ
" 20 土	河川・出口	2	発掘	C-I・C-II トレンチ
" 21 日	河川・出口	2	発掘	C-I・C-II トレンチ
" 22 月	河川	1	発掘・実測	C-I・D・E トレンチ
" 23 火	河川・出口	2	発掘・Gに溝状遺構発見	F・Gトレンチ
" 24 水	河川・	1	発掘	G-I・Ⅱトレンチ
" 25 木	河川・河川芳	2	発掘・実測	F・G-I・Ⅱ トレンチ
" 28 日	河川	1	発掘	G-Ⅲトレンチ
" 29 月	河川	1	発掘	G-Ⅲトレンチ
44. 10. 1 水	河川	1	発掘・実測・写真	G-Ⅲトレンチ
" 2 木	河川	1	発掘	G-Ⅲ・Nトレンチ
" 3 金	河川	1	発掘・実測・写真	G-Nトレンチ

年 月 日曜日	調 査 者	計	事 項	調 査 地 域
44.10.5日	河口・出口	2	発掘	G-N・Vトレンチ
" 6月	河口	1	発掘	G-Vトレンチ
" 7火	河口	1	発掘・実測	G-Vトレンチ
" 8水	河口	1	発掘・実測	G-V・Mトレンチ
" 9木	河口	1	発掘・Dトレンチは G-Vと重なる	G-Vトレンチ
" 10金	河口・出口	2	発掘	G-V・Mトレンチ
" 11土	河口・吹上高校生10名余	10	発掘	G-V・M・K・O トレンチ
" 12日	河口・吹上高校生2	3	発掘・実測	G-V・M・K トレンチ
" 13月	河口	1	発掘	G-V・Mトレンチ
" 14火	河口	1	発掘	G-V・Mトレンチ
" 16木	河口	1	発掘・実測	G-Kトレンチ
" 17金	河口	1	発掘・溝中のpitより 後期土器片	G-Kトレンチ
" 19日	河口・出口	2	発掘・G-0の溝を切り 込む住居址	G-K・Oトレンチ
" 21火	河口	1	発掘・実測	G-Oトレンチ
" 22水	河口・大野・中間	8	発掘・実測	H-I・II, G-K Oトレンチ
" 23木	河口	1	発掘・実測	G-O・H-I トレンチ
" 26日	河口・玉竜高校生7	8	発掘	H-I・IIトレンチ
44.11.1土	河口	1	発掘・区界除去	G-V・M・M・K トレンチ
" 3月	河口・出口・牛山	3	発掘	G-X・Mトレンチ
" 5水	河口・中間	2	発掘	G-X・Mトレンチ
" 17月	河口	1	発掘・器台発見	G-Mトレンチ
" 18火	河口	1	発掘・挟入石斧出土	G-Mトレンチ
" 23日	河口・阿口芳	2	発掘・遺構あらさる	G-X・Mトレンチ
" 24月	河口	1	発掘・実測	G-X・Mトレンチ
44.12.26金	河口・吹上高校生7	8	発掘	G-XM～XM トレンチ
" 27土	河口・出口・有元・当房 吹上高校生8	12	発掘	G-XM～XM トレンチ
" 28日	河口・出口・有元 吹上高校生6	9	発掘・XMより木ノ実出土	G-XM～XM トレンチ
" 29月	河口・出口・有元 吹上高校生6	9	発掘・実測・写真	G-XM～XM トレンチ
" 30火	河口・出口・有元 吹上高校生8	11	発掘・XMより木ノ実まと まて出土	G-XM～XM トレンチ
" 31水	河口	1	発掘・XMの木ノ実実測	G-XM・XM トレンチ
45.1.1木	河口	1	発掘	G-XMトレンチ

年 月 日 曜日	調 査 者	計	事 項	調 査 地 域
45. 1. 2 金	河口・出口・有元 吹上高校生 7	10	発掘	G-XIII ~ XIV トレンチ
" 8 土	河口・出口・有元・当房 吹上高校生 4	8	発掘	G-XIII ~ XIV トレンチ
" 24 土	河口・出口・大野・中岡・林 吹上高校生 11	16	発掘	G-XIX, i-0 ~ II, i'-1 ~ II
" 25 日	河口・出口・林・当房 吹上高校生 12	16	発掘	69 住居址
45. 4. 18 土	河口・出口	2	実測	G-XV ~ XVI トレンチ
" 19 日	河口 吹上高校生 8	9	発掘	J トレンチ
" 26 日	河口・中岡・吹上高校生 6	8	発掘	J-0 ₁ , 0 ₂ , L ₁ M トレンチ
" 29 水	河口・出口・吹上高校生 12 玉竜高校生 11	25	発掘	J'-II ~ V, K, L M, N
" 30 木	河口・河口芳	2	発掘	M トレンチ
45. 5. 3 日	河口	1	試掘	G 西方 80 m 地点
" 4 月	河口	1	発掘	住居址, 貯蔵穴 6 1・2・3
" 5 火	河口	1	発掘	住居址, 貯蔵穴 6 1・2・3
" 7 木	河口	1	発掘	住居址, 貯蔵穴 6 1・3
" 8 金	河口・河口芳	2	発掘	住居址, 貯蔵穴 6 2・3
" 9 土	河口	1	発掘	住居址 6 1, M-III トレンチ
" 10 日	河口 吹上高校生 4	5	発掘	住居址 6 2
" 11 月	河口	1	発掘 G 溝の北部延長を試掘	住居址 6 1
" 12 火	河口	1	試掘	G-XIX の北部
" 13 水	河口	1	試掘	G-XIX の北部
" 14 木	河口	1	発掘	住居址 6 2
" 15 金	河口	1	発掘	住居址 6 2
" 16 土	河口	1	発掘	住居址 貯蔵穴 6 2・3
" 17 日	河口 吹上高校生 9	10	発掘・南高校生見学	P トレンチ
" 18 月	河口	1	発掘	住居址 6 1 L-II トレンチ
" 21 木	河口	1	発掘・比高測定	L-I・II トレンチ
" 22 金	河口	1	発掘	S, T, U, V トレンチ
" 24 日	河口・出口・吹上高校生 4	6	発掘	M トレンチ
" 25 月	河口	1	発掘	N-0・I・II トレンチ
" 26 火	河口	1	発掘	N-0, L-0, M-I・0 トレンチ
" 30 土	河口・河口芳	2	発掘	N-0・I・II, O-II トレンチ
" 31 日	河口 吹上高校生 2	8	発掘	O-0・I・II・III トレンチ

年 月 日曜日	調 査 者	計	事 項	調 査 地 域
45. 6. 10 水	河口	1	発掘	O-0・N・V トレンチ
" 16 火	河口	1	実測	住居址6 1
" 17 水	河口	1	実測	住居址6 2
" 19 金	河口・河口芳	2	発掘	住居址6 5, O-III・N トレンチ
" 21 日	河口	1	発掘	住居址6 5
45. 7. 2 木	河口	1	発掘	住居址6 6 L-I トレンチ
" 3 金	河口	1	発掘	O-I, L-I トレンチ
" 4 土	河口	1	発掘	住居址6 6 N-Q ₂ トレンチ
" 5 日	河口	1	発掘	住居址6 6 N-0, O-0
" 6 月	河口	1	発掘	住居址6 6 O-0 ₁ ・0 ₂
" 8 水	河口	1	発掘	住居址6 6
" 9 木	河口	1	発掘・清掃・写真	G, L, N, O トレンチ
" 12 日	河口・出口	2	実測	住居址6 5・6
" 17 金	河口	1	残存遺物取りあげ あとしまつ	住居址6 5・6
調査日数 94 日	調査人員 54名 調査延人数 322人			調査面積 8148㎡

第2表 入来遺跡調査表(第2次)

年 月 日曜日	調 査 者	計	事 項	調 査 地 域
45. 10. 14 水	河口・中間 入夫7	9	発掘	R トレンチ
" 15 木	河口・中間・出口 入夫7	10	発掘	R トレンチ
" 16 金	河口・中間 入夫7	9	発掘	R, X, G トレンチ
" 17 土	河口・中間・上村・出口・田中・入夫7	12	発掘	G, Y トレンチ
" 18 日	河口・中間・上村・出口・馬籠・竹之内 入夫7	18	発掘	X, Y, G トレンチ
" 19 月	河口・中間・田中 入夫7	10	発掘・実測	X, Y, G トレンチ
調査日数 6 日	調査人員 7名 調査延人数 63人			調査面積 154㎡

第3表 入来遺跡調査表(第3次)

年 月 日 曜日	調 査 者	計 事 項	調 査 地 域
50.4.1 火	河口・本田・多々良・平島・片野坂	5 発掘	西南地区
" 2 水	河口・本田・旭・多々良・平島・前田	6 発掘	西南地区
" 3 木	河口・本田・旭・多々良・平島・前田	6 発掘	西南地区
" 4 金	河口・多々良・平島	8 発掘	西南地区
" 5 土	河口・旭・平島・多々良・前田・大迫・有元	7 発掘・実測	西南地区
調査日数 5日	調査人員9名 調査延入数27人		調査面積 4.9 m ²

II 遺跡の環境

入来遺跡は鹿摩半島の西岸中程にあり、吹上砂丘の内側の低地に位置している。

鹿摩半島は九州の南部にあり、東の大隅半島と鹿児島湾を隔てて対し、南北に長く延びて東支那海に突出している。長さは約100Km、東西の最大幅約52Km、最小幅約19Km、東西両岸共に内側へ湾曲して中程が最も狭く、南端に至って広がり、西に野間半島、東に池田半島となって突出している。

地形は大隅半島に比べ著しく低く、低山性を呈し、高峻な連嶺は見られず、九州山系の末端が金峰山脈となって半島の骨格を形成しているが、地皮の破綻と火山の噴出によって山脈は分断され、隔離した山塊が所々に蟠居し、この間に火山噴出物が堆積して丘陵台地が著しく発達している。

地勢は半島基部より南へ次第に低くなり、鹿児島市西方の松元に至って低い台地となり、更に南方に至ればやや高く、高原状を呈する。

金峰山脈は著しく低く、低山性又は丘陵性の地貌を呈し、主峰の金峰山でも636mにすぎず、高峰446m、高倉山445m、田上嶽805m、長屋山520m、蔵多山475mといずれも低い。

半島南部は再び低平な台地となり、東端の池田半島は火山が多く、西端は断崖をなして海に入り、肢節に富み良港湾となっている。

半島の中南部においては分水界は著しく東に偏り、地勢は鹿児島湾岸に向かっては急傾斜を似て下り、西方東支那海沿岸に向かっては緩かな傾斜を似て海岸に至っており、河川はいずれも西流して東支那海に注ぎ、その主なものに奥川・神之川・永吉川・伊作川・萬之瀬川があり中でも萬之瀬川は川内川に次ぐ長流となって流程約82Kmを示し、流域面積は半島随一である。

鹿児島湾に注ぐものは甲突川があり河口に鹿児島島の平地をつくり、鹿児島湾に沿って長く延長し、

狭い海岸平野を形成している。

東支那海沿岸も低平で海岸平野を形成し、戸崎鼻より野間半島基部に至る間は弓状の海岸線を呈し、所謂吹上浜の砂丘を形成している。延長は約40kmに達し、最高点は約60m、砂丘は南方へ行くに従って発達し、萬之瀬川河口付近では幅約275kmに及ぶ。

金峰山脈は砂岩及び粘板岩の累層から成り、砂岩は時として非常に厚い層となっている。

これを囲むような状態で火山噴出物の堆積がみられ、半島基部および池田半島・野間半島・半島南西部には輝石安山岩および玄武岩が分布し、南部および中部以北には広大なシラスの分布が見られる。河川の侵食によって生じた溪谷には至る所に泥礫岩の断崖が見られ、灰石と呼ばれている。また河川の流域および海岸には沖積層および海岸砂層の堆積がみられる。

薩摩半島西岸の細長い海岸平野は、開析によって分断された低平なシラス台地と、沖積低地とが交錯し、海浜ではこれを砂丘が被覆している。現在は沖積低地は水田として利用され、シラス台地では畑作が行なわれ、集落の成立が見られるが、遺跡の分布も水田地帯にのぞむシラス台地の縁辺部に見られる。

入来遺跡も伊作川下流の水田地帯の南縁にのぞむシラス台地に成立したもので、台地は標高20m余りあり、周辺を伊作川とその支流の梨子川、および下戸川とその支流が取り囲む形で流れ、台地中央の畑地帯を挟んで西端には入来浜、東端には入来の集落が立地している。遺跡は台地東端の舌状に突出した部分に成立しており、前面の水田周辺の台地上には白寿・今田A・今田Bなどの遺跡が分布している。

薩摩半島における弥生遺跡の分布状況を見ると、海岸平野と各水系に沿った沖積地に限られ、弥生時代後期になると西岸・南岸・東岸の別なく一様な分布を示すようになるが、中でも比較的平地の多い鹿兒島市付近および萬之瀬川流域には濃密な分布が見られる。

しかし中期・前期にさかのぼると遺跡数は激減し、西海岸では日吉町帆港(中期前半)、松元町東昌寺(前期後半)、吹上町黒川(前期後半)、全小野(前期後半)、全今田B(前期後半)、全入来(中期前半・中葉)、金峰町高橋(前期前半・前期後半・中期中葉)、全萬之瀬川河床(中期)知寛町下郎(中期後半)があり、西岸北部までいっても川内市久留渠(前期・中期中葉)、全大小路(前期後半)を加えて10遺跡にすぎない。

一方鹿兒島湾岸では鹿兒島市玉里(前期後半)、全一の宮(中期後半)、全高見(中期前半)、全草野南(中期中葉)、山川町成川(中期後半)とわずか5遺跡を数えるのみである。また薩摩半島南岸では中期・前期に属する遺跡は現在のところ1ヶ所も発見されていない。

以上のようにこの時期の遺跡は著しく数が少ないだけでなく、地域によって密度差が大きく、特に前期についてみると、鹿兒島湾岸では鹿兒島市玉里遺跡只1ヶ所であるのに対して、西岸では5遺跡を数え、なかでも高橋貝塚は唯一の前期前半の遺跡として注目される。

縄文時代晩期の遺跡についてみると、鹿兒島湾岸では鹿兒島市光山、指宿市大渡の2遺跡がある。西岸では知寛町永野、加世田市上加世田、全垂門、全花敷之原、金峰町天神原、全棚川、全高橋、吹上町塩水流、全北郷之元、全今田A、全黒川、全上草田、串木野市井手下の18遺跡があり、そのうち高橋、塩水流、北郷之元、今田A、上草田の5遺跡は夜日式土器を出土している。

以上の遺跡分布の状況は、能登半島西岸に弥生文化発生の基盤があったことを示し、事実、弥生時代前期より中期中葉までは、この地域が圧倒的に優勢であったことを示している。

Ⅲ 遺跡の概観

入来遺跡は弥生時代中期の集落と基城から成り、更に上層には弥生時代後期の集落が重なった複合遺跡である。遺跡の立地する台地はおおよそ菱形を呈し、吹上砂丘の内縁に、砂丘に食い込むような形で形成されている。台地の両端は伊作川の河口に接し、入来浜集落内の東南部にある三叉路を境として、西側は砂丘の堆積が見られ、東側は黒色火山灰土の分布が見られる。台地北東端の立岩嶺西側断崖は砂岩から成り、吹上小学校付近の地層は、表層は黒色火山灰層（厚さ1.5m）、第2層はシラス層（厚さ2.5m）、第3層は砂岩層（厚さ8.0m）、第4層は風化砂岩層となっている（田中建設による）。台地東端の水田地帯へ突出した舌状台地に入来遺跡が立地しているが、ここではシラスの層が厚く、周辺の水田面以下に達している。したがってこの菱形台地は西端部の砂丘地を除いて、シラスによって被覆され、更にその上に黒色の火山灰が堆積して形成されたもので、東北端に基盤の砂岩層がわずかに露呈している。

遺跡の立地する舌状台地は標高20m、最高点22m、台地上は平埴で畑作に利用され、両側斜面は削られて宅地となっている。遺跡地は台地上面より南斜面へかけて分布し、台地東端より西方へ250m、東端では幅100m、西端では幅150mの範囲で、面積は約3,100㎡である。

調査は東北端と西南端の一部について行ない、東北地区南斜面（宅地）を86.4㎡、東北地区台地面（畑地）を482.4㎡、西南地区（道路沿い崖上）を4.9㎡の範囲で発掘した。

東北地区南斜面（第2図・第3図）

弥生時代中期中葉を主とし、中期前半と後半の遺物もわずかに出土する。遺構は落ち込みや柱穴も見られるが、宅地化によって攪乱を受け遺構の様相は不明である。

東北地区台地面（第2図・第5図）

弥生時代中期前半および後期の遺構が重複している。

弥生時代中期前半の遺構

舌状台地の東端を北々西一南々東の方向に横断するV字溝と、その西方に弧形のU字溝があり、V字溝に沿って西側に円形の貯蔵穴と、小ピットが検出された。これらの遺構からはいずれも中期前半の土器、その他の遺物が出土している。

調査完了前に東北地は採土工事によって破壊されたので、未発掘地に遺構が残されていたと思われるが、一切は烏有に帰した。

弥生時代後期の遺構

舌状台地東端に10ヶ所の住居址といくつかの柱穴が検出された。住居址には前述の中期V字溝

と重なるものもある。これらの遺構からは弥生時代後期の遺物の他に須恵器、土師器等の出土が見られ、弥生時代後期の土器とされてきたものの時代判定について問題が投げかけられた。

後期についても中期と同様の理由で未発見のまま滅失した遺構があったものと思われる。

西南地区（第2図・第17図）

南吹上駅へ通ずる道路の拡幅によって発見された溝状遺構である。弥生時代中期中葉の遺物が出土した。

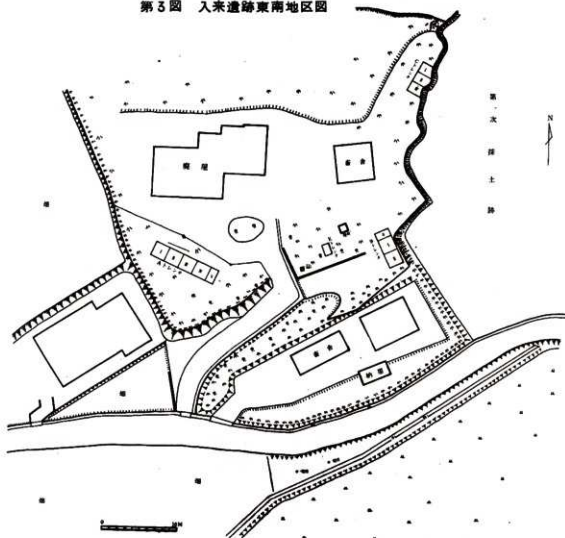
発掘の外に、調査期間中に遺跡のほぼ中央を南北に開通した農道の西側断面にV字溝並びに貯蔵穴と思われる遺構が発見された。時期は弥生時代中期に属するものと思われる。

調査は遺構の一部にすぎないので全貌を明らかにすることはできないが、台地面の東端より中央農道付近まで弥生時代中期前半の遺構が分布し、台地南斜面は中期中葉の遺構、西南端地域は中期中葉以降の墓域と推定される。

後期の遺跡はこれらの遺構と重なり、且つより広い範囲に及んで形成されている。

Ⅳ 北東地区の調査

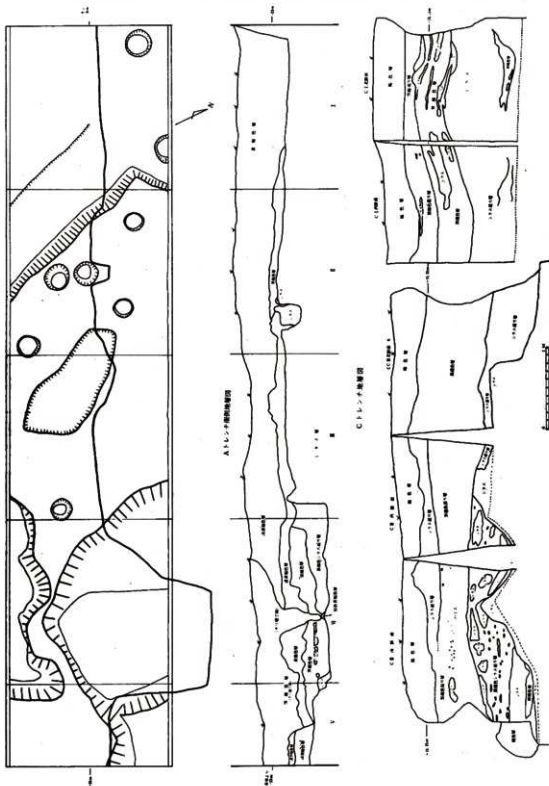
第3図 入来遺跡東南地区図



1. 北東地区南斜面の調査

第一次初頭の調査で、台地東北部の南斜面の宅地について行なった。宅地は台地面より一段低く削平され、台地との界は約5mの断崖となっている。A・B・C・F・Eのトレンチを設定して調査を行なった。

第4図 入来遺跡A・Cトレンチ図



1) Aトレンチ(第8図・図版1・第4図)

Aトレンチは宅地西南隅の竹藪中に、西北-東南の方向に2m×9mを設定し、2m毎に区分して西北よりⅠ～Ⅴ区とした。但しⅤ区は1m×2mの区域とした。

層序は表層-黄褐色層(50cm)、第2層-黒褐色層(10cm余)、第3層-シラス層(基盤)となっているが、東南部Ⅳ・Ⅴ区では著しく乱れている。また西北部においても遺物包含層と思われる黒褐色層が、シラス層の上に直接重なり、Ⅳ区においては黒褐色土とシラスが混合した部分、あるいはシラスの浮き上がりなどが見られ地層擾乱のあとが見られる。以上のような地層の乱れは宅地化の時の削平とその後の人工によるものであろう。

基盤に掘り込まれた浅い落ち込み(Ⅱ～Ⅲ区)、浅い溝(Ⅰ～Ⅱ区)、8ヶの柱穴状落ち込み(Ⅰ～Ⅲ区)などが見られるが、破壊された遺構の残存したものか、否か不明である。

Ⅳ・Ⅴ区に見られる不定形の深い落ち込みは雑物の投棄が目立ち、最近の掘り込みと見られる。以上のような擾乱が行なわれていたにもかかわらず弥生時代中期の遺物が相当量出土した。

2) Bトレンチ(第2図・第8図)

Bトレンチは宅地東南端に、土砂の採取によって生じた断崖に沿って、略南北方向に、2m×5mを設定し、北より0・Ⅰ・Ⅱ区に区分した。0区は拡張区で1m×2mの範囲で、他は2m×2mの区劃である。

この地点は吹上高校生が土器・貝殻を発見した地点であるが、調査の結果は全面に擾乱を受けていることが明らかとなり、新しい馬骨の出土も見られ、発見された貝殻は現代の投棄によるものと判断された。しかし遺物の出土も見られた。

8) Cトレンチ(第2図・第8図・第4図)

Cトレンチは宅地東北隅に、断崖に沿って南北方向に2m×4.4mの不定形の区域を設定し、北よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ区とした。トレンチの東端は壁に開いているために凹凸があって不規則な形となっており、トレンチ幅も北端では1.7m、南端では2.7mとなった。各区の長さはⅠ区とⅢ区は1.5m、Ⅱ区は1.4mである。発掘はⅠ区Ⅲ区についてのみ実施した。

Cトレンチでは表層は30～40cmで褐色を呈し、第2層は厚さ20～80cmあり、黒褐色シラスまじり層、第3層は厚さ30～60cmを計り、黒褐色を呈し、シラスの浮き上りによる間層が見られ、この傾向はⅠ区に著しく、Ⅲ区ではバミスの混合ヶ所が見られた。第4層は厚さ50～80cmにあり、黒褐色層とシラスの混合したもので、シラスのみの堆積部分も見られるが、黒褐色層が表層の状態で分布した。第5層は基盤をなすシラス層で、Ⅰ区では1.8m以下、Ⅲ区では1.6m以下となっている。

上記の地層のうち黒褐色の地層は遺物を包含しており、弥生時代中期の土器を出土し、かなりの大きな破片もみられるが、出土状況が不安定で、当初の状態を示すものは見られない。地層中には黒色土中に焼けた部分の見られるヶ所もあったが、第3層のシラス層中より陶器片が検出され、全面に擾乱を受けていることが判明した。第4層以上のシラス層は一度掘り上げた後に埋め戻された

2次堆積層であり、遺物包含層もこの時に破壊されたものと思われる。

4) E・Fトレンチ (第2図・第8図)

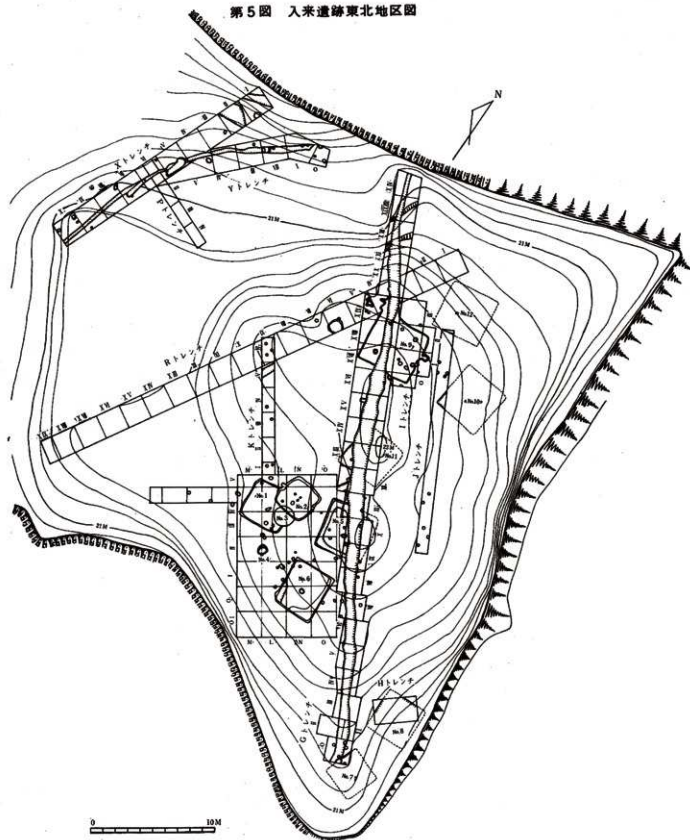
Eトレンチは宅地南側、Bトレンチより、FトレンチはCトレンチ北方15mの地点にそれぞれ1m×1.5mの試掘を行なった。Eトレンチは表面より僅か20～80cmでシラス層に達し、FトレンチはCトレンチに類似した擾乱状況を示した。

以上の各トレンチの調査結果から見て、対象とした宅地は全面的に擾乱されているものと推定され、擾乱を受けた原因は宅地の造成にあったものと思われる。宅地は台地の南面に北風をさけて立地している。現在の宅地は台地より5mの落差をもつ平坦地であるが、当初は緩傾斜をなして低地へ接していたものであろう。北風を防ぐ意味もあって地引きを行ない平坦化したものと思われる。本来この傾斜面も遺跡地であったが、宅地造成を主因とし、その後の人工によって全面的な破壊を受けたものと思われる。

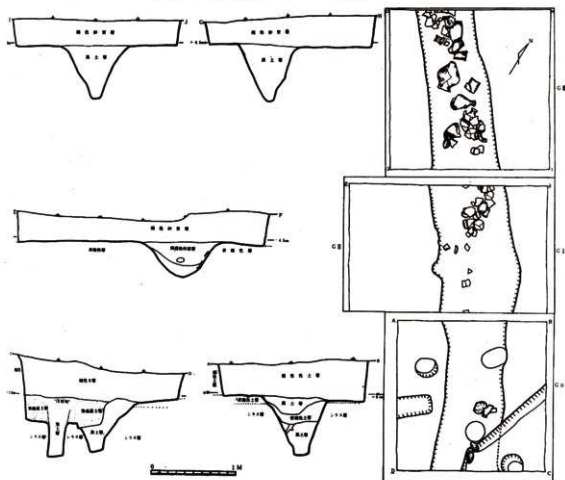
2. 北東地区台地面の調査

北東地区台地面の調査は第1次、第2次に渡って遺跡地台地面東北地区について行なった。調査によって明らかになった遺構は弥生時代中期のV字溝・U字溝・貯蔵穴と弥生時代終末期の住居址である。

第5図 入来遺跡東北地区図



第6図 入来遺跡G0~GⅢ溝図



1) V字溝(第2図・第5図~第10図・第15図・図版1~図版14・図版22・図版23・図版25・図版27)

はじめに調査した宅地が全面に覆って攪乱を受けていたので、宅地の北に隣接する台地に調査地を移し、台地東南端に、西北-東南方向の1m×1.5mのGトレンチを設けて試掘を行なった。

褐色砂質の表層80~40cmを除去すると、第2層の黄褐色層に掘り込まれた黒褐色粘質層の落ち込みが、トレンチの西側半分に検出された。そこでトレンチ幅を西側へ2m拡げて落ち込みを追求めた。調査の結果落ち込みは幅約1m、深さ40~60cmの溝状遺構であることが判明し、内部からは弥生式の甕形土器・甕形土器の破片が出土した。甕形土器は頸部と胴部の界に2条の平行沈線をめぐらし、甕形土器はわずかにあげ底の脚台を有し、口縁端には浅い刻みを有するもので、弥生時代前期末か中期初頭に属するものと思われた(第6図GⅠ・GⅡ、図版2)。

調査はこの溝状遺構の追求から始める事とし、最初の試掘溝をG-I区、拡張区をG-II区とし、

溝状遺構の検出状況に合わせて加減し、GⅢ区以下GXXV区まで北方へ漸次延長し、南方へは一区画を延長してG-0区とした。一区画は2m×2mないし2m×3mで、G-Ⅳ区のみは上底1.5m、下底2mの台形である。

Gトレンチの北端は台地の北麓まで約1mをあまし、南端は台地の南突出部まで約5mに達しは台地を横断する形となり、延長47.5mに達した(第5図)。

調査地域は台地の東端に当たり、標高20mの等高線で囲まれ、周辺は急崖となっている。台地面は平坦であるが東端に近い地点(G-XⅡ～XⅣ)に最高点があり標高22mを示し、四方へ緩傾斜をもって下り、周辺部は21m乃至それ以下の標高となって、最高点との差は1m以上に及ぶ。

Gトレンチの発掘によって発見された溝状遺構は台地の最高点を通り、北々東-南々西の方向に台地東端部を横断し、両側の崖端に達しているものと推定される。発掘によって確認された長さは47.5mであり、多少の振れはあるが大体直線状に構築されている。

台地の地層は表層(第1層)に70cm台から80cm台の厚さをもつ平均58cm厚さの褐色砂質層があり、次に第2層の、厚さ50cm台から20cm台、平均48cmの黄褐色層があり、その下には基盤をなすシラス層が非常に厚く堆積している。溝状遺構は第2層を掘り抜き基盤のシラス層まで掘り込まれている。

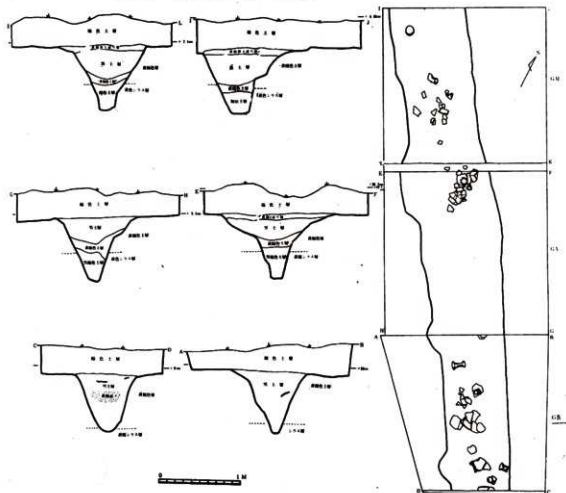
第4表 入来遺跡V字溝計測表

単位 cm

トレンチ名	V 字 溝		地 表 高	2 層 表 面 の 高 さ		V字溝底の高 さ
	幅	深 さ		東 側	西 側	
G- 0	77	61	21,23 21,25	20,23 20,55	20,49 20,59	19,97 19,98
G-I・Ⅱ	90	61	21,32			
G-Ⅲ	67	57	21,33	20,87	20,87	20,33
G-Ⅳ	93	72	21,53	20,96	20,99	20,24
G-Ⅴ	109	74	21,60	21,05	21,06	20,32
G-Ⅵ	102	72	21,65	21,06	21,07	20,35
G-Ⅶ	80	83	21,72	21,15	21,20	20,37
G-Ⅷ	105	97	21,88	21,22.5	21,25	20,28
G-Ⅸ	104	102	21,93	21,16	21,27	20,25
G-X	137	106	21,93	21,22.5	21,27	20,21
G-XⅡ	150	106	21,85	21,81	21,85	20,29
G-XⅢ	119	103	21,86	21,25	21,23	20,15
G-XⅣ	142	115	22,00	21,22.5	21,84	20,19
G-XⅤ	129	113.5	21,96	21,85	21,86.5	20,23
G-XⅥ	111	99	21,97	21,81.5	21,85	20,36
G-XⅦ	116	86	21,97	21,20	21,85	20,53
G-XⅧ	74	61	21,89	20,99.8	21,10	20,53
G-XⅨ	56	58	21,77	21,00	21,09	20,51
G-XX	109	80	21,63		21,30	20,50
G-XX	100	91	21,54		21,24	20,35

トレンチ名	V 字 溝		地 表 高	2 層 表 面 の 高 さ		V 字 溝 底 の 高 さ
	幅	深 さ		東 側	西 側	
G-XXI	90	68	21,28.5		20,89	20,21
G-XXII	58	46	20,90.5		20,54	20,08
G-XXIII	80	20.5	20,90.5		20,18	19,98
G-XXIV	87	68	20,91		20,14	19,46

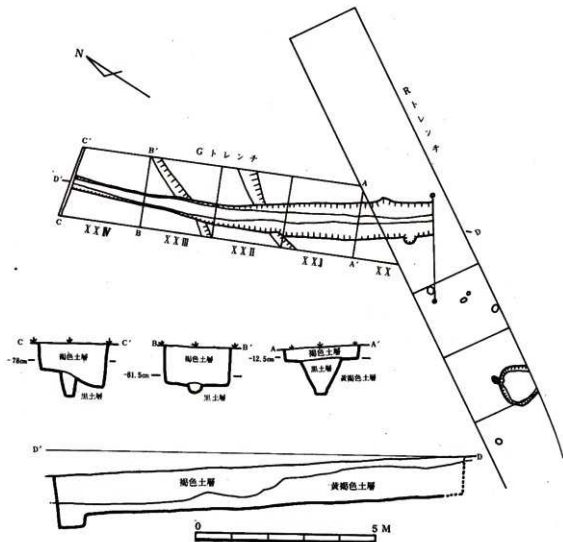
第7図 入来遺跡GⅣ～Ⅵ溝図



溝の形態はいわゆるV字溝であるが底部は6cm～21cm、平均18cm幅の平坦面を有し、溝の側面は急角度で立ちあがっているが、途中から外反し上部ではかなりのひろがりを見せる。溝中に堆積している土は黒色土が主体となっているが、中程に部分的に黄褐色土の堆積が見られる。これは溝が色に広がる部分と関係があり、溝中にある程度の堆積が行なわれた時点で溝幅が拡大され、この時に側壁を削った土が一部落ち込んで堆積したものと思われる。

溝幅は最大150cmから最小30cmで平均95cmであるが、中央付近が最も広く両端は狭く、特に北端は著しくせばまっている。溝の深さは最大113cm、最小30cm、平均80cmで、幅とも多少関連があり、幅の広い中央付近が最も深い。

第15図 入来遺跡GXX~XXIV溝図



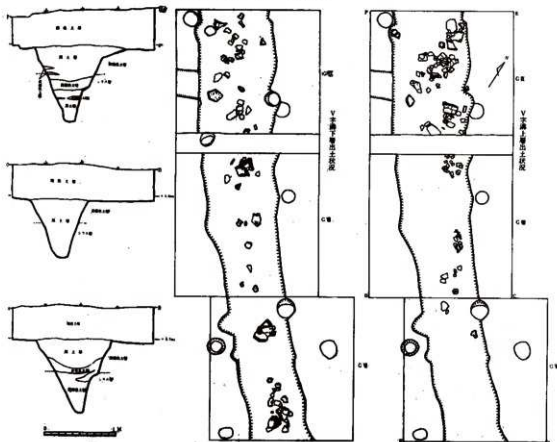
溝が掘り込まれている第2層（黄褐色層）の表面の地形は現地表面に類似して中央が高く最高218.6mの標高を示し、両端は低く、南端は204.9m、北端は201.4mとなっており、南端では最高点より0.87m、北端では1.22m低い。現地表面と異なる点は北よりのG-XXV、XXVI地点で窪地があり、北端付近のG-XXVII地点に比高85cmと20cmの段落ちが継続して2段みられる

ことである。

上記の第2層表面の地形に薄状の遺構が形成されているが、溝底の標高は必ずしも第2層表面の地形に左右されていない。溝底の最高点はG-XVI、XVI 地点で2.058mであり、第2層の表面地形では窪地と一致する。溝底は最高点を堺として北は漸次下降しG-XXV 地点で8.2cmの段落を呈し北端では19.46mを示し、最高点より1.07m低い。

一方南へは漸次下降するがG-V地点を低点として再び上昇し、G-V地点では2.087mを示し再び下降して南端では1.997mとなり最高点より0.56m低い。したがって南底の傾斜は第2層表面の傾斜より緩かであり、とくにG-V地点よりG-XV地点間の20mは中くばみとなって降雨時には滞水した筈であり、この区間は溝幅が広くかつ深いばかりでなく両はしが狭くなって一区画を形成しているように見える。

第8圖 入来遺跡GⅦ～K遺跡圖



墓中の遺物出土状況については中央と南・北両側に分けて述べる。

V字溝南側部分の(G-0~G-W区)遺物出土状況。

G-0~G-V区間14mのV字溝部分で、底部は南へ傾斜し、幅・深さ共に比較的に小さい。

V字溝は第2層の黄褐色土層に掘り込まれているが、G-V区からM区へかけては表層と黄褐色土層との間に薄い黒褐色土層が見られる。V字溝内の堆積は黒褐色土が主体であるが、場所によっては溝の側壁の黄褐色土が溝の拡張などの原因によって削り込まれて間層をなし、あるいは黒褐色土との混合層をなして4～8層の地層を形成する。しかし出土遺物の型式には地層による変化は認められない。

この区域は出土遺物が豊富で特に土器の出土が多く、G-0区では完形鉢形土器、I・II区には完形の壺形土器・壺形土器・壺形土器（壺形土器とセット）、III区では中に壺形土器2個をはさんで両側に壺形土器1個づつを配し、ことにそのうちの壺1個と壺1個は完形器で、壺は原形を保ち横位で出土している。IV区では壺2個のうち1個は完形、V区は壺と壺、M区は完形の壺、M区には完形の壺の外壺・壺の大きな破片が出土している。以上の外に土器破片も多く出土しているが完形土器の多いのが目立ち、種類も壺形土器・壺形土器が大部分を占め壺形土器・鉢形土器が各1個と非常に少なく高杯などは破片も発見されていない。

土器以外ではノミ形石器・打製石器・砥石などが出土し、自然礫も見られる。

遺構としてはG-0区が弥生時代後期の住居址によって一部を切り込まれている外、G-0区、G-IV区、G-V区にV字溝内またはその付近に柱穴と見られるピットが発見されているが内部に後期の弥生式土器片を出土するものがあり、弥生時代後期の住居址にも接近していることから後期の遺構と考えられる。

注意を要することはV字溝内に焚火の跡が残されている事である。G-I・II区では溝底の東側に幅20cm、長さ90cmに渡って木灰が1～2cmの厚さに堆積し、その北端部には木炭が検出されており、G-V区では北端付近の溝の西斜面が幅20cm長さ40cmの範囲の土が経く焼け、炭・灰・焼けた礫を出土している。これに続くG-V区では焼けた骨が検出された。以上の状況から見て溝中で長期に渡って焚火が行なわれたものと推察される。

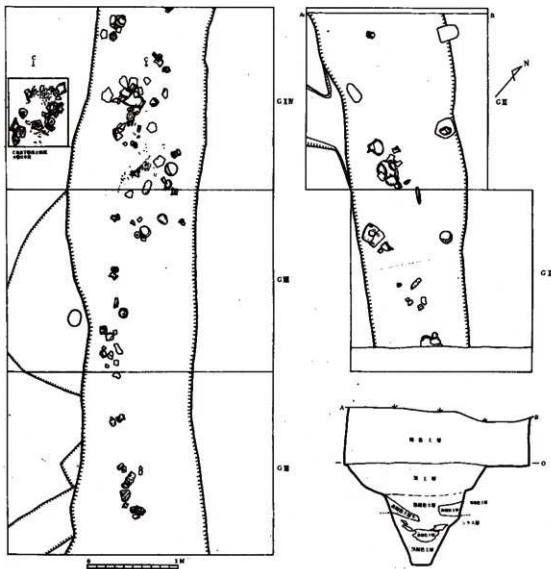
V字溝中央部分（G-III～G-IV区）の遺物出土状況。

G-III～G-IV区間20mのV字溝部分で、溝の底部は南北両端が高く、中央が少々窪んで形である。溝の幅・深さは共に最大で、平均で幅は約1.2m、深さ1mである。構築も南側と同様で第2層の黄褐色土層に掘り込まれ第3層のシラス層に達している。V字溝内の堆積状況も同様で黒褐色土を主体とし、溝側の黄褐色土が部分的に削り込まれて層をなす部分もみられる。この他に弥生時代後期Ⅲ、Ⅳ1、Ⅳ9の各住居址がV字溝上に重なって構築され、この時期の柱穴等が設けられている部分が見られ、ごく一部ではあるがV字溝の上層部に弥生時代後期の土器片の混入が極く少量見られる。

出土遺物は比較的少ないが、土器の種類は壺・壺を主とし南側と同様な傾向を示している。この区域で完形土器が出土したのはG-V区南側に2個の壺形土器が上下に重なって出土したのが見られただけであり、他にはスカシ入りの土器脚台がG-K～G-V区へかけて出土したのが注意された。

石器では磨製石斧・挾入石斧・ノミ形石斧・磨製石鎌・打製石鎌・砥石・叩石の出土が見られたが、こ

第9図 入来遺跡GX～XIV平面図



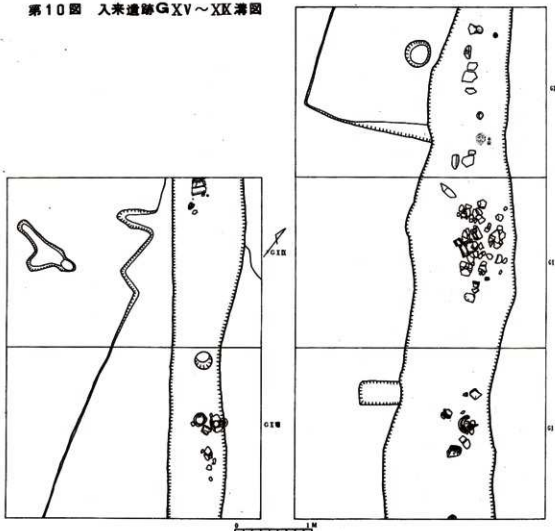
のうら打製石鏃は、側壁の黄褐色土を削った際に混入したと思われる縄文式土器片と同一時期と見られる。

この他に竪石製品に特殊なものが見られ、G-X区には岩偶？、G-XⅡ区に岩偶？、G-XⅢ区に輪状装飾品が出土している。

焚火はここでも行なわれたものと見られ、G-IⅢ区には焼けた獣骨、G-IⅣ区は焼けた骨を含む相当量の獣骨・木炭・灰、G-IⅤ区は焼けた獣骨、G-XⅡ区は焼けた土、G-XⅢ区は木炭・獣骨、G-XⅣ区は木炭の出土が検出されている。

この区域で最も注意されたのはG-XV ~ G-XVI区へかけて出土するフングリである。とくにG-XV区では上層、下層に渡って出土し、量も多く、共伴して出土した変形土器の状況から見てこの中へ貯蔵されたものと推定されたことである。

第10図 入来遺跡G-XV~XVI溝図



V字溝北側部分(G-XV区~G-XVI区)の遺物出土状況。

G-XV区~G-XVI区14mのV字溝部分で、溝の底部は南より北へ大きく傾斜し落差は105cmに及んでいる。溝は北端へ行くにしたがって急にせばまり、溝の上縁を削り取られて浅くなり、平均の溝幅68cm、深さ62cmである。

この地域は表層が著しく厚く後世の人工がみられ弥生時代後期の土器に混じって中期の土器も少量発見される。V字溝中の遺物は極端に少なく、G-XV区に変形土器口縁部とG-XVI区に変形土器大片が出土したのみである。

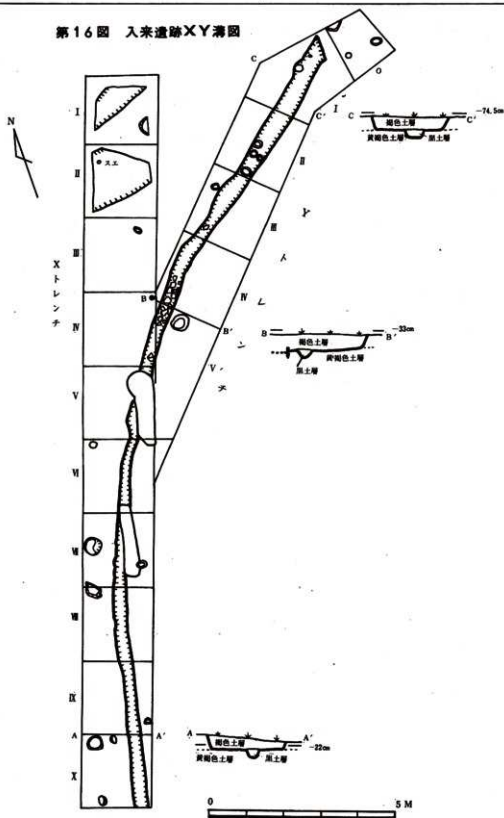
石器ではG-XX区に打製石鏃、G-XX区に石製有孔円板、G-XXIV区に石磨丁の出土が見られたが、流失したのか、本来なかったのか不明であるが焚火の跡は見られなかった。

以上8区分してV字溝の記述を行なったが、總体的に見るとこのV字溝は台地の東端部を南北に横断しておりこれによって台地を区画する意図があったものとみられる。構築にあたっては中高の地形に逆らって中央部をふかく両端を浅く掘ってあり底部を水平に保つ意図が察せられるが、結局地形に支配されて両端の溝底部は南と北へそれぞれ傾斜している。

V字溝より出土する土器に共通する特色は器面が荒れて表面に粒子が現われ、ざらざらした感触を受けることである。これは長期間に渡って露呈されていたためで、この地方の砂丘形成の一因とされる強烈な北西の季節風と、この風向と一致するV字溝の方向、降雨、土器の質等が重なりあって起こった現象であろう。

V字溝は構築後若干の期間を経た後に溝幅の拡張が行なわれている。これは溝幅拡張のために削られた側壁の土が、溝の側壁の傾斜変換線以下に堆積していることから推定される。拡張の現因は悉くV字溝の機能を高めるためであったろう。溝内出土遺物の状況から見て溝拡張の前後に時期的な変化は考えられないからこのV字溝はおよそ一時期に属するものと考えられる。

第16図 入来遺跡XY溝図



2) U字溝(第5図・第16図・図版24・図版25-57・図版26・図27-60)

第1次調査の終末期にV字溝・貯蔵穴等と同時期の遺構の所在を確かめるために、昭和45年5月17日、調査地域の西端部境界ぎりぎりに1×8mの東西方向のPトレンチを設定し、西より2m毎に区画してI～N区に区分して発掘した。地層の堆積状況はGトレンチ設定地域と同様で第2層の黄褐色土層に掘り込まれた2～8のピットと共に、P-I区を途めに横ざる溝状遺構が発見され溝中には黒褐色土が堆積していることが判明した。

第2次調査ではこの溝状遺構を追求することとし、調査地域西側境界に沿って北北東-南南西方向に2×20mのXトレンチを設定し北より2m毎に区画してI～X区に区分調査した。溝状遺構はX-X区～N区まで検出されたがこの地点より北はXトレンチより東側へ逸れることが判明したので、X-N区より分岐して2×7mのYトレンチを設け更に先端で屈折して3m延長し6区分して東より0・I～V区に区分して発掘を実施した。

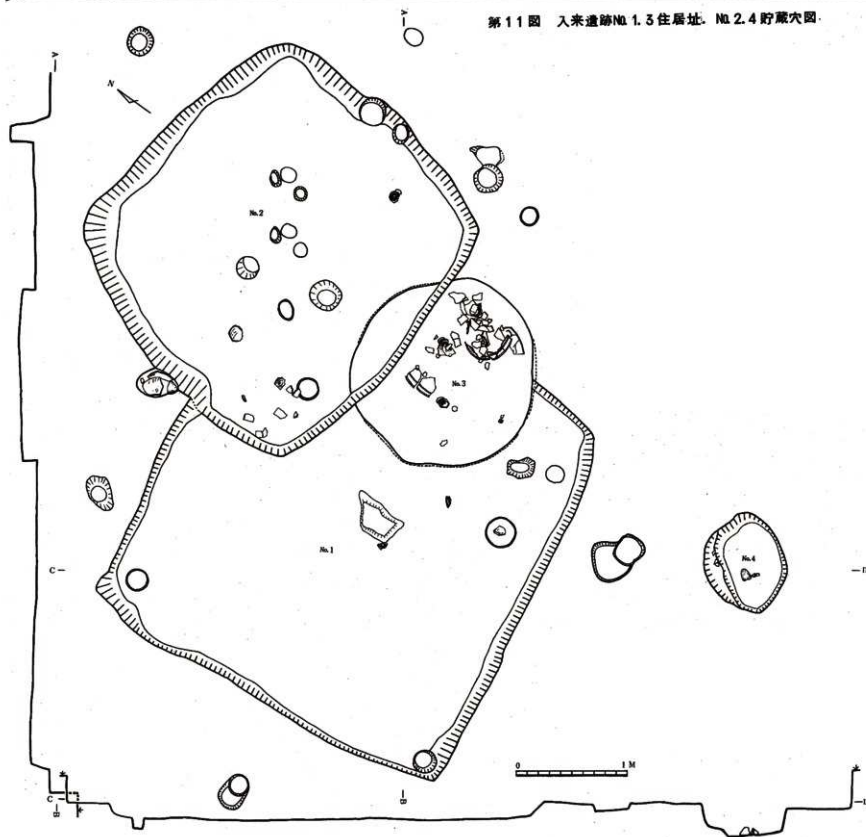
溝状遺構は台地北側崖付近Y-0区に一端が始まり弧形を描いて南へ延び台地東側崖へせまる勢を示し発掘トレンチの南端X-X区に達するが南端は究めることが出来なかった。調査した溝の延長は22m、断面形はU字状を示し、溝幅は北端で46cm、中央X-V区南端で18cmを示すがその他の部分は殆ど80cmであり、溝の深さは平均して20cm余りである。

地層は第1層に褐色砂質の耕作土が80～85cmの厚さに堆積し、第2層は黄褐色土層、以下は基盤のシラス層である。溝状遺構は第2層の黄褐色層に掘り込まれており、溝内にはV字溝と同様に黒褐色土の堆積がみられる。地形はXトレンチK区付近が最も高く、21.2mを示し、南北へ緩やかに傾斜して台地北側崖線X-I区付近では20.8mでその差は90cmである。溝状遺構も地形に従って南より北へ傾斜し西端の高さの差は約60cmを示している。

溝状遺構はX-V区、X-M区で現代の字貯蔵穴によって切断されている他、Y-I区に2個、Y-II区に4個のピットが検出されているが、形も大小さまざまで深さも10cm～60cmと差が大きい。この他にX、Yトレンチ内で発見された16個のピットと共にその機能は明らかでないが、溝状遺構との直接の関連は見出されない。

溝状遺構内の出土遺物は弥生式土器を主とし、若干の縄文式土器片を混じっているが全体の出土量は少なく、Y-N～V区にややまとまった土器群の出土が見られた。出土した土器の種類はV字溝と同じく壺形土器と甕形土器に限られ時期も同時期と思われる。溝状遺構の性格はその規模と遺構の状況から見て土地の区画以外の機能は考えにくい。

第11圖 入来遺跡No.1.3住居址、No.2.4貯蔵穴図。



8) 貯蔵穴(第5図・第11図・図版15・図版16)

第1次調査終末期の昭和45年4月26日以降にGトレンチV字溝以西の台地面に同時期の集落址などの遺構の存在をたしかめるために、Gトレンチ西側にG-X区南角より5mの間隔においてN-W66°の方向に1×1.2mのKトレンチを設け、南よりI-M区に区分し、更にKトレンチを2m幅に拡張し南へ延長して2×1.2mのLトレンチを設け南よりO₁・O・1-N区に区分した。調査の進行に従ってLトレンチの西側に接してM、東側に接してN・Oトレンチを設けた結果縦1.3m、横8mの区域を2m方眼に区画して調査することとなった。各区画の記名は縦列を西よりM・L・N・Oのアルファベットで呼び、横列は南よりO₁・O・1・I・II・III・Vの数字で呼ぶこととした。但しV列は1m幅である(第5図参照)。

この区域の調査では北西隅に㉔1住居址と㉔2住居址、更に㉔3貯蔵穴が8重に重なって発見された。構築の時期は㉔8の貯蔵穴が最も早く、次に㉔1住居址が一部重なって構築され、最後に㉔2住居址が前2者を切って構築されたものである。㉔3貯蔵穴は弥生時代中期前半、㉔1・㉔2住居址は弥生時代後期に属するものと見られる。

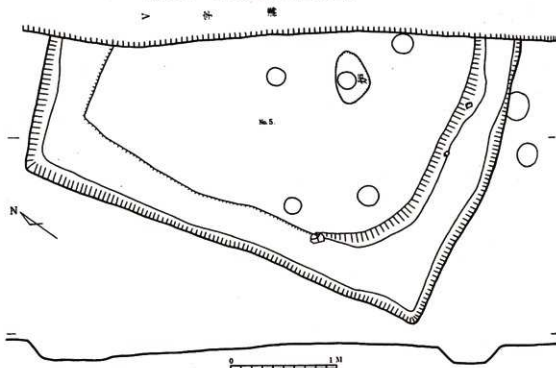
㉔3貯蔵穴はL-II・N区、N-III・N区の4区にまたがっており、第2層の黄褐色層に掘り込まれ内部には黒褐色土が堆積している。形は円形で直径160cm、深さ80cm、床面に下るにしたがって僅かに広がっている。㉔1住居址によって西側の大半を削り取られ、また㉔2住居址によって北側の一部を削り取られているが、両住居址ともに床面が浅いために貯蔵穴の下半分は完全に残存していた。

遺物の出土状況では土器が目立ち、中心部から東部へかけて甕形土器と蓋形土器が見られ、その他の遺物では鉄1個が出土している。自然遺物では東側床面に近かく木炭・獣骨・魚骨が相当量出土し、中心付近北側には中層の土が焼けて土器を覆っているのが見られた。

㉔3貯蔵穴より南へ2m隔てて、長径90cm、短径75cmの略楕円形の㉔4ピットが発見されている。底部は2段になり最深部で27cmである。M-II・L-II区に渡って第2層の黄褐色層に掘り込まれ内部には黒褐色土が堆積している。出土遺物はきわめて少なく、包含層から若干の弥生式中期前半の甕形土器片の他、床面に同時期甕形土器脚台と軽石礫を出土したのみであったが、㉔8と同様に貯蔵穴の可能性が考えられる。

以上に挙げたV字溝・U字溝・㉔3貯蔵穴・㉔4ピットは同一時代のもので、弥生時代中期前半に属し、これらは相互に関連して一つの遺構の一部を形成しているものと思われ、中期前半の集落などの遺構がU字溝以西に埋存されているものと推定される。

第12図 入来遺跡No.5住居址図



4) 住居址(第5図・第11図・第12図・第18図・第14図・図版5-14・図版6・図版18-80・図版17・図版18・図版19・図20・図版21・図版22・図版28・図版25-57・図版26-58)

住居址はすべて弥生時代終末期に属し、V字溝付近に所在したもののみで、調査した数10個のうち完全に調査を終了したもの4個で他は1部分の調査に終った。前述したように地主による採土によって調査未了の住居跡が破壊されたからである。

Ⅲ-1 住居址

M-Ⅲ・N・V区, L-Ⅲ・N・V区に渡って発見された。Ⅲ-8貯蔵穴の一部を削って構築されたが、後にⅢ-2住居址によって北東部を削り取られた。第2層の黄褐色土層中に掘り込まれ、内部には黒褐色土が堆積している。

形は隅丸方形で径は南北358cm, 東西367cm, 住居址の壁は内方へ緩かに傾斜し床は浅く15cm程度である。四隅に柱穴を有し、東南隅には変形のピットが別に1個見られた。炉址は見られないが床面中央よりやや南に幅26cm, 長さ50cmの範囲中盛土状の焼土が発見された。

遺物の出土は少ないが、北東部Ⅲ-2住居址に接するあたりには成川式土器片の出土がみられ、東南部Ⅲ-8貯蔵穴付近床面からは入来式土器が出土している。後者は貯蔵穴を削って住居を造成した際に混入したものであろう。時期は成川期のものと思われる。

Ⅲ-2 住居址

L-N・V区、N-II・N・V区、O-N区に渡って発見された。Ⅲ-3貯蔵穴・Ⅲ-1住居址の一部を削り、これらの遺構と一部重なって構築されている。形は隅丸方形で南北径282cm、東西径310cm、床面の深さは15cmである。第2層の黄褐色層に掘り込まれ、内部には黒褐色土が堆積している。住居址の壁は緩かに内側へ傾斜し、床面には炉址は発見されず柱穴と思われるピットは中央付近に2個、西南隅付近に1個、東壁中段に1個が見られるが床面中央付近の2個のうち南よりにある1個はⅢ-1住居址のものと推定される。残り8個のピットは住居址の東南隅にかたよってこれによる上屋の構造は推定がむずかしい。この他に床面内に4個の小ピットが見られた。

注意を引いたのは住居址周壁のうち西側の壁の中段に作り出された浅いピットと、ちょうどこの対称点にある東壁の浅いピットである。西壁のピットは住居址に外接する縦28cm横25cmの楕円形で、内部に壺形土器の大片を数個、数くような形で出土し、東壁のピットは壁中に25cm×24cmの略円形に作られ、底部は住居址床面と同一水準となっている。調査時点では土器の出土は見られなかったが当初には土器が配置されたことも考えられる。

遺物の出土量は少なく、住居址南側にかたより、土器片若干と磁石が発見されている。土器には菰窪凸帯をもつ壺形土器片、上げ底の壺形土器脚台並に須恵器片が見られる。弥生時代終末期に比定される。

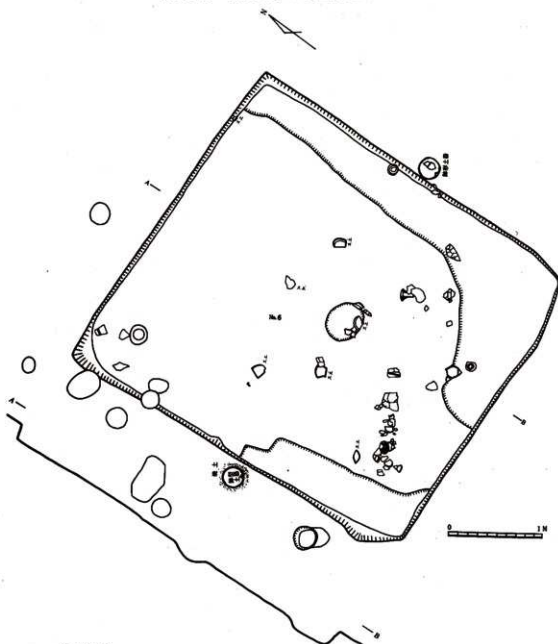
Ⅲ-5 住居址

O-II・III・N区、G-K・X・Y区に渡って発見された。Ⅲ-2住居址の東側86cmを隔ててV字溝をまたいで構築されているが、調査はV字溝西側の部分についてのみ実施するに止めざるを得なかった。

方形住居址で南北径432cm、東西径は推定400cmであり、住居址内に40～50cm幅の周溝をめぐらし、内部の床面は掘り込みが浅く、最高部分は住居址外と同一水準を示している。床面南よりに50cm×33cmの楕円形の凹所が見られ、土が焼けている点から炉址と見られる。柱穴と考えられるピットは付近に10個発見されているが上屋との関係は不明である。

出土遺物は少なく入来式土器片と、成川式土器片と思われるものが若干出土している。入来式土器片はV字溝を削った際に混入したものと思われ、住居址の時期は弥生時代終末期と思われる。

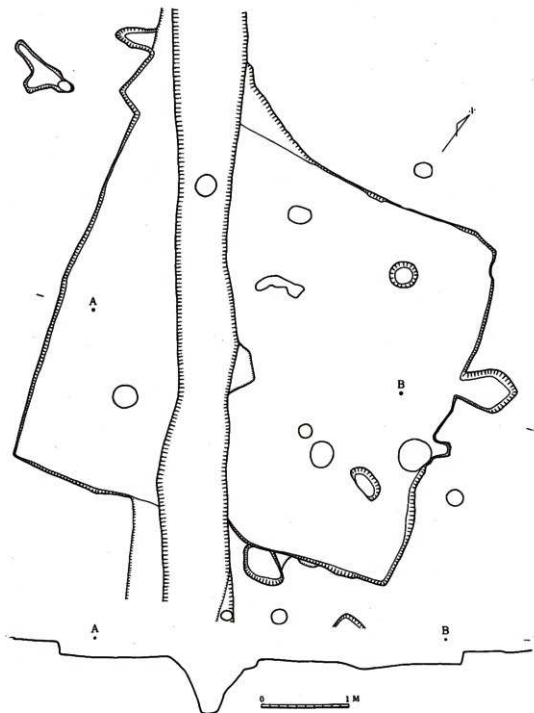
第13図 入来遺跡No.6住居址図



No. 6住居址

L-O・I区, N-O₁・O・I・II区, O-O₁・O・I区に渡って発見された。方形住居址である。No. 5住居址の南150cmを隔て、北辺862cm、南辺825cm、西辺894cm、東辺887cmで床面の深さは15cmあり中央に42cm×85cmの楕円形の窪んだ炉址を有すし、西壁と東壁に沿って部分的に溝を構築している。

第14図 入来遺跡No.9住居址図



この住居址で最も注意を引いたのは住居址壁に沿って外側に径20cm程の鉢形土器を、口縁部を地表に露呈して東西両側に対称して埋置していたことである。このうち西側の鉢形土器の周辺は土が焼けた木炭片が散布し焚火がしばしば行なわれたことを示していた。

上層の構造を推定できるような柱穴はここでも明らかでなく、西北辺に10個のピットが見られるだけであった。

出土遺物は比較的に多く、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、甌、小甕、浅鉢などと共に須恵器も出土している。これらの土器は大部分が床面に密着して出土し、住居址に沿って埋められた鉢形土器と共に同時性を示すものである。

Ⅲ-9 住居址

G-XⅦ・XⅧ・XⅨ・XⅩ 区でV字溝と重なって発見された方形住居址である。完掘するために東側へ拡張してIトレンチを設けた。

南北径420cm、東西径465cm、床面の深さ15cmで床面中央付近に凹所があるが、V字溝と重なっているために形が明瞭でない。あるいは炉址であったかもしれない。

この住居址の特色として周辺に作り出しが見られる。東壁には2ヶ所の張り出しが並んでつくられ1個は幅18cm奥行20cmあり、他は最大幅50cm、奥行70cmの菱形で、両者共に底面は住居址床面と同一水準である。

南壁の張り出しは幅50cm、奥行40cmで底面は住居址床面より僅かに高い。最後の一ヶ所は住居址の北西隅の張り出しで幅、奥行きともに1m以上と思われるが、V字溝と重なっているために詳細は不明である。

柱穴は四隅にそれぞれ1個の他に、床面に4個あり、周辺に4個発見されている。

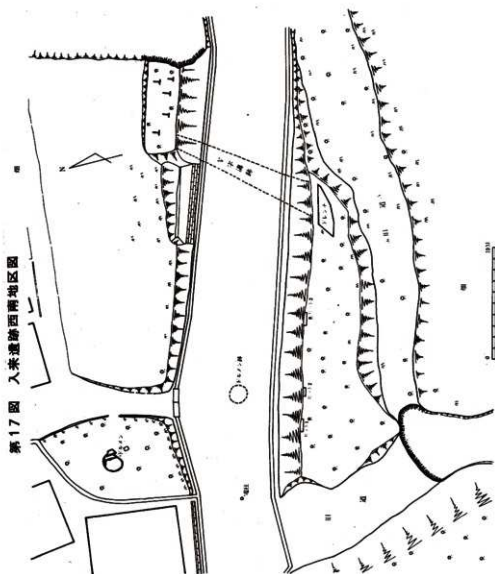
出土遺物は少ないが、結縄凸帯を有する甕形土器片、上げ底の脚台などの発見があり、弥生時代終末期の遺構と考えられる。

Ⅲ-7・Ⅲ-8・Ⅲ-10・Ⅲ-11・Ⅲ-12 住居址

以上にあげた住居址の他に住居址の一部を発見したにとどまり、土砂採取工事によって完掘することが出来なかった5個の住居址がある。Ⅲ-7住居址はG-0区で発見されたもので床面が比較的深く30cmである。Ⅲ-8住居址はG-Ⅲ区東側1mに設けた2m×3.5mのHトレンチで発見されたもので周壁2ヶ所が発見された。床面は深く出土遺物も見べきものがあつた。方形住居址と考えられる。他はG-XⅧ・XⅨ 区に発見されたⅢ-11、住居址Gトレンチ東側に設定したJトレンチにおいて発見されたⅢ-10、Ⅲ-12住居址であるがいずれもごく一部が発見されたにすぎないが同一時期に属するものと思われる。

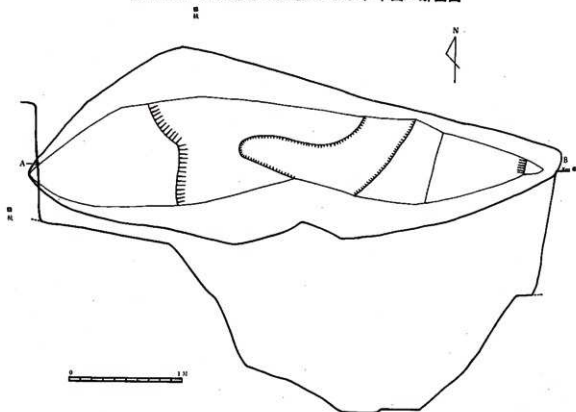
V 西南地区の調査

第三次に調査した地域で、遺跡の西南端に当たり、入来支石墓より東南約 30 m の地点である。



発見の端者は入来遺跡を通過し南吹上駅に至る町道の拡幅工事によって支石墓付近の道路両側が削られ、崖面にV字溝の断面が発見されたことによるものである(第2図・第17図・第18図・第19図・第20図・図版29-64・65)

第18図 入来遺跡西南地区トレンチ平面・断面図

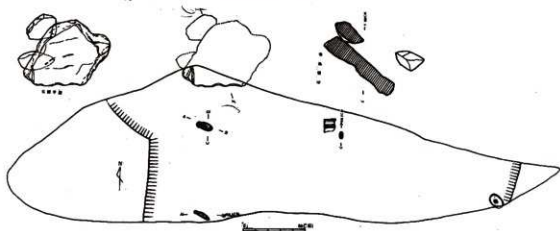


溝状遺構は町道の両側の崖面に断面が発見されていることから、道路開通以前には現在の道路を北東-南西方向に横断する形で構築されていたものと思われる。現地形は集落形成によって人工による変造を受け溝状遺構の残存部分は極めて少なく、町道北側では幅8m長さ8mの柱状に削り残された台地上に一部分(長さ8m)残され、南側では現在の町道と、その東側を通っていた旧町道との間にはさまれた細長い高地に一部分(長さ8m)が残されているにすぎない。

調査は町道北側の基地をさけ、南側の高地を可能な範囲で調査を行なった。調査地域は東西475cm、南北、最大幅170cmの菱形地域4.9m²である。

遺跡地の地層は、第1層(表層)茶褐色層-約25cm、第2層 暗茶褐色層-100cm、第3層 淡褐色火山灰層-50cm(地点によっては黄褐色火山灰層)、第4層 紅褐色バミス泥り火山灰層-40cm、第5層(基盤) 灰白色シラス層の層序を示し、溝状遺構は第3層の淡褐色火山灰層に掘り込まれたものである。

第19図 入来遺跡西南地区トレンチ図



溝状遺構

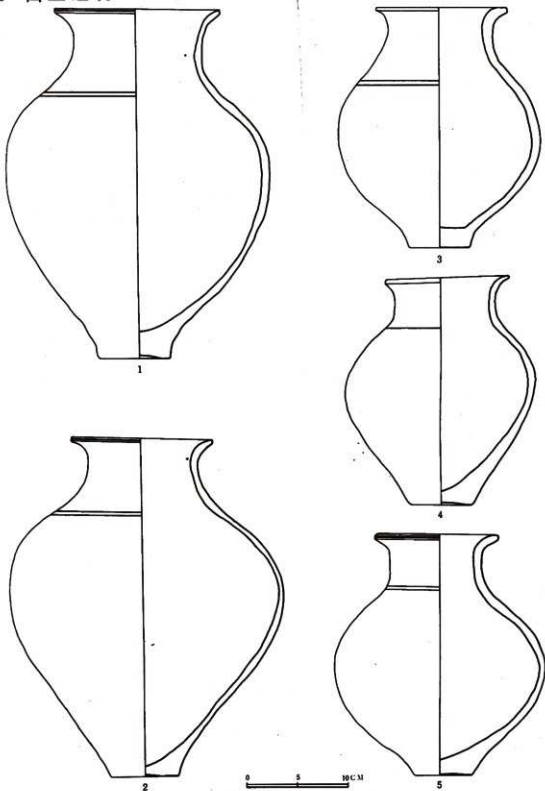
溝中に堆積した地層は4層を数え、上部より第1層—黒褐色層、第2層—黧褐色層、第3層—明茶褐色パミス混り層、第4層—黒褐色パミス混り層となっており、このうち第1、第2層が遺物を包含し、第3、第4層は無遺物層である。第3、第4層は掘削中に堆積したが、或いは掘削後直ちに堆積したもので、溝の形態を整えるために埋め戻したものかもしれない。

溝状遺構は道路側崖面ではV字状を示しているが、発掘地点では幅が拡張された形もU字形に近く径8m、深さ1.25mとなっている。溝の西壁に近く縦75cm・横65cm・厚さ14cmの菱形の板石が斜位に埋没しており、その下から枕石のような形で縦26cm・横20cm・厚さ18cmの石と、縦30cm・横15cm・厚さ14cmの石が出土した。また板石の直下には第4層の土と思われる紅褐色の土塊が見られ、更にその下からは縦横50cmの範囲から、厚さ20cmに渡って木炭まじりの土が検出された。

菱形板石の埋置された時期は、板石下の土層の状態からみて、溝状遺構が形成された後に掘り込みが行なわれ板石が置かれたものではないかと思われ、その時期は検出された土器から見て溝状遺構形成の時期とあまり時間の経過はないものと思われる。この板石遺構は埋葬に関するものであろう。

遺物の出土状況は、表層の茶褐色層および第2層の暗茶褐色層からは弥生時代後期の土器片が出土し、溝中の堆積土のうちく上部からは弥生中期後半の土器片が見られたが、下部からは中期中葉の土器片のみが出土した。出土遺物中特に注意すべきものに軽石製岩偶がある。前記の板石より80～40cmを隔てた地点から出土した。検出された地層から見て弥生時代中期中葉に属するものと見られる。

Ⅶ 出土遺物



第 21 図 入来遺跡出土壺形土器圖

1:GI~II.2, 2:GIII.2, 3:GX.2, 4:GVII.4, 5:GX.2

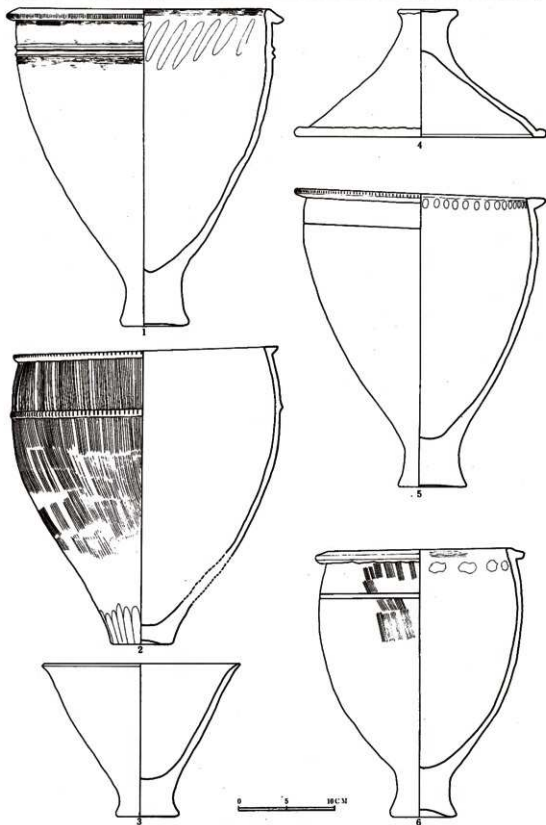
1. 土 器

入来遺跡で発見された土器には主体の弥生式土器の他に少量の縄文式土器と須恵器とが出土している。

弥生式土器は次に述べる5種類に分類されるが、その他に他の地域の系統に属するものが若干見られる。

1) 第1類土器 (第22図-2, 図版46-2)

本遺跡の出土例は少なくU字溝に1例、V字溝に2個体分の変形土器が出土しているのみである。高橋Ⅱ式(考古学集刊8巻2号, 鹿児島県高橋貝塚, 河口貞徳)に属するが高橋貝塚出土の高橋Ⅱ式に比較してやや胴部が張り、底部が小さい。第2類土器への移行的な形態と見ることができよう。

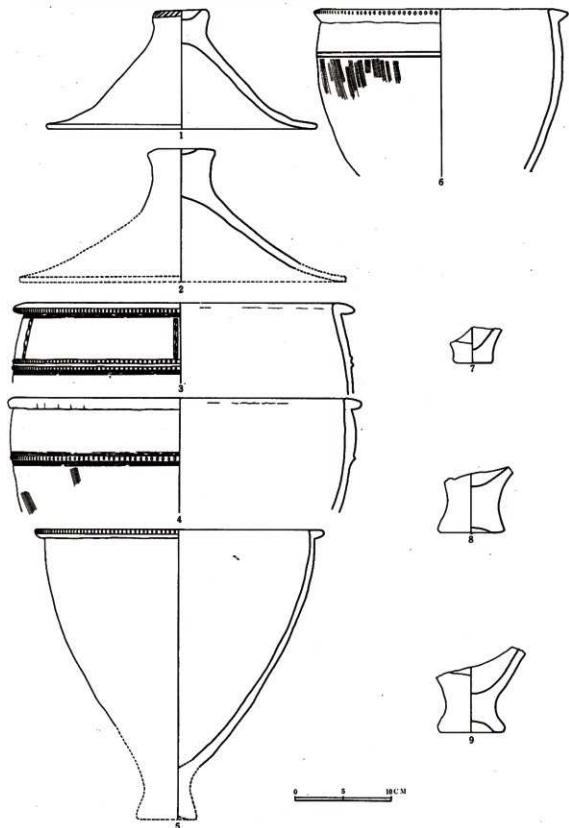


第22図 入来遺跡出土甕・鉢・蓋形土器図

1:GN.2, 2:YN~V.2, 3:GO.2, 4:GI~II.2, 5:GI~II.2, 6:GV~VL.2

壺形土器（第22図-2，図版46-2）。U字溝から出土した土器である。胴部が張り底部へ急に細くなるやや不安定な平底の土器で，口縁部の外側に粘土をはりつけ，平坦面をつくり口縁下の凸帯とともに浅い刻目を施している。胎土の粒子は比較的細かで，器面は黄褐色を呈し刷毛目仕上げである。外面下部に篋削りの跡を残している。口径28cm，高さ80cm，弥生時代前期末に比定される。

2) 第2類土器（第21図，第22図，第23図，第24図，図版41，図版42，図版43，図版44）



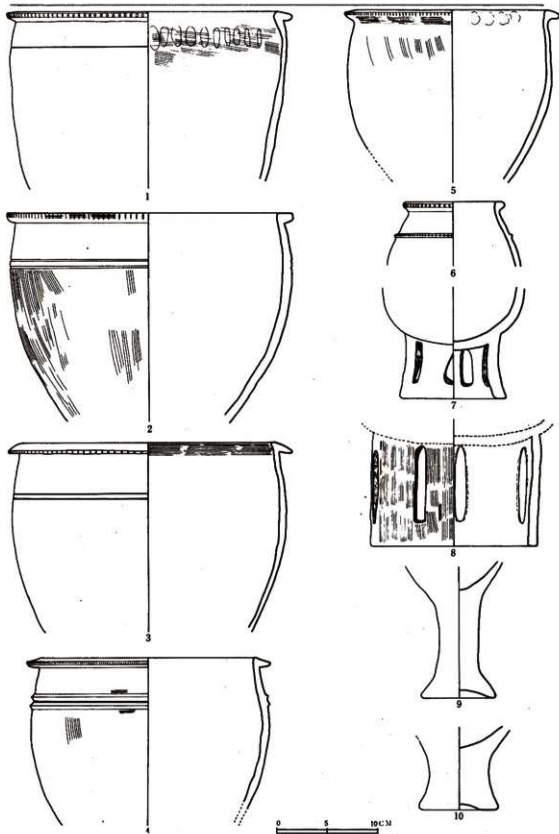
第23圖 入来遺跡第3号貯蔵穴出土土器圖
1~9: L.III.2-pit 3

この様式の土器は、本遺跡の主体をなすものでV字溝、U字溝、貯蔵穴などより出土している。浅い沈線または刻目を有する凸帯をめぐらすのが特徴である。入来式（鹿児島考古5号、南九州弥生式土器の再編年、河口貞徳）と呼ばれ弥生時代中期初頭に比定される。

胎土に多くの細砂粒をふくみ、器面が剝離して粒子の露呈したものが多く、色調は黄褐色または灰色、紅色などを呈し、輪襷みの部分の内面、口縁部のはり出した部分の下面などに指先の圧痕がよく残されている。器形は壺・鉢・甕および甕蓋などがしられている。

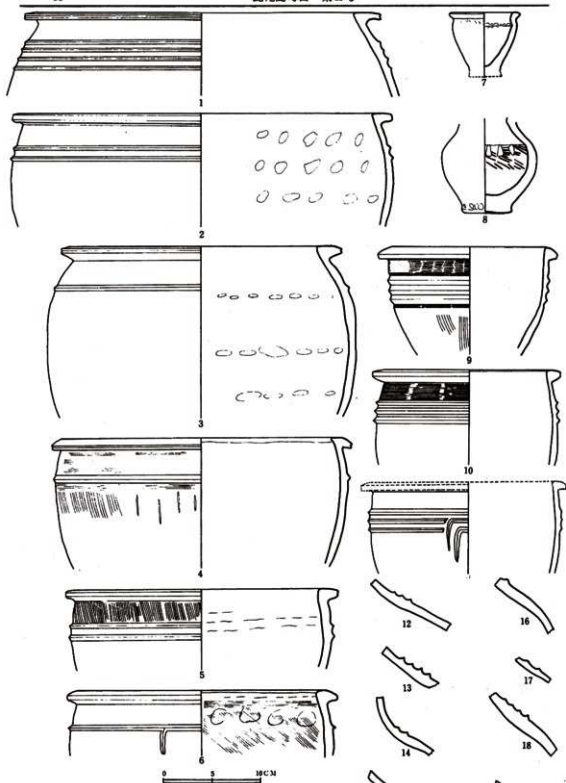
壺形土器（第21図-1～5、第24図-7・8、図版41-1・2、図版43-1～3、図版44-8・4）

この壺形土器は、高さ22～28cmぐらいの小型のものと、高さ33～35cmぐらいの大型のものがある。土器の形成には輪襷みの手法が明瞭で、内面の接合部分に指頭の圧痕を残すものが見られ、肩部から頸部へかけて、内面に圧縮されて生じた縦じわがみられる。器形は胴の最大径が高く、底部へ細く延び、小形の平底またはやや上げ底の不安定な底部に終る。頸部は口縁部へ向かってしまり、口縁端で外反する。胴部と頸部のつぎ目には2条ないし1条の浅い沈線をめぐらすのが特徴である（第21図-1・2・4）。この他に胴部の最大径が中位にあり、底部の安定した器形もみられる（第21図-3・5）。尚特殊な土器として脚台付の壺形土器と思われるものがある（第24図-7・8）。円筒状の脚台に6ヶ所の縦長楕円形のすかし孔を有し、上部は壺形土器と推定される。



第24図 入来遺跡出土甕・脚台付土器図

1: GXⅣ.2, 2: GK.2, 3: GXⅤ.2, 4: GⅢ.2, 5: GV.2, 6: CⅢ, 7: GXⅡ, 8: GK~X.2, 9: GV.2, 10: GXK.2



第25図 入来遺跡出土甕・壺形土器圖

- 1: A, 2: BII, 3: 試掘, 4: CI.6, 5: 関宅,
 6: B.O.1, 7: GK.4~2, 8: AII.1, 9: B.O.1,
 10: 関宅, 11: B.O.1, 12: GXV.2, 13: 関宅,
 14: GK.2上, 15: GII.2, 16: GK.2, 17: GXV.2, 18: 試掘, 19: 試掘

鉢形土器 (第22図-8, 図版48-6)

高さ16cmの小型のもので、1例だけ発見された。下端の張り出した部厚い底部から、直線的に上方へ開いた胴部となり、わずかに外反する口縁部に終る器形である。器面は磨耗しているが、外面の一部に磨き跡を残している。火熱を受けた跡が見られないことから容器として使用されたものと思われる。

甕形土器 (第22図-1・5・6, 第28図-8~6, 第28図-1~6・10, 図版42-1~8, 図版-5・4, 図版-1)

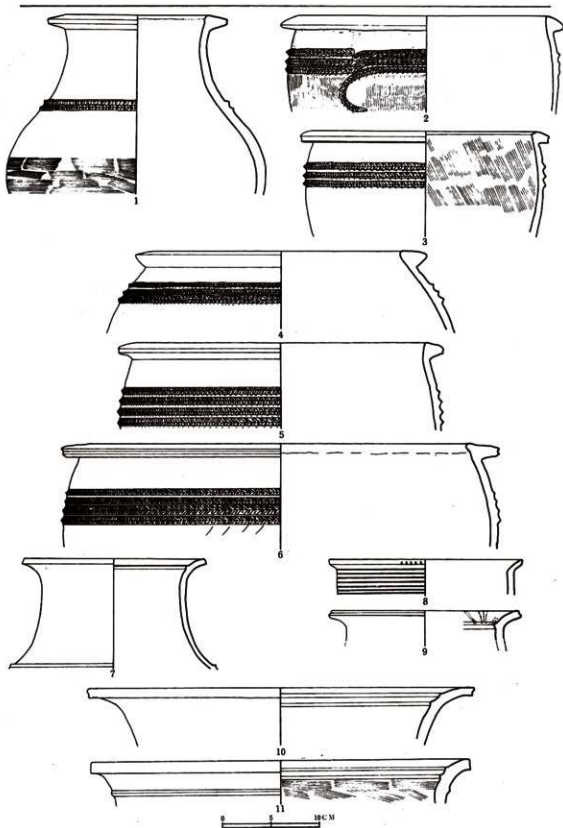
高さ25~30cmぐらいの中型のものと、高さ40cmぐらいの大型のものがある。口径が器の最大径にあたり、まれに胴径が口径をわずかにこすものがある(第28図-8)。器形は充実したわずかに上げ底の脚台を有し、胴部の最大径が中位よりやや上方にある。口縁部外面に粘土紐を貼りつけて、上面を水平あるいはやや外下りに仕上げている。文様には口縁下に1~2条の沈線めぐらすもの(第22図-5)、口縁下に断面三角形の凸帯を1~2条めぐらし、口縁端またはこの凸帯に刻目を施すか、この両方に刻目を施すもの(第22図-1, 第28図-8~5, 第24図-4・5)、前2者の複合した形で、口縁端に刻目を施し、口縁下に1~2条の沈線めぐらすもの(第22図-5, 第28図-6, 第24図-1~8)の3種がある。

甕形蓋形土器 (第22図-4, 第28図-1・2, 図版44-2)

笠形をした甕の蓋である。頂部はややくぼみ両側への張り出しがみられ、裾部の肥厚したもの(第22図-4)、頂部のくぼみが深いもの(第28図-1・2)などがある。高さ12~18cm。

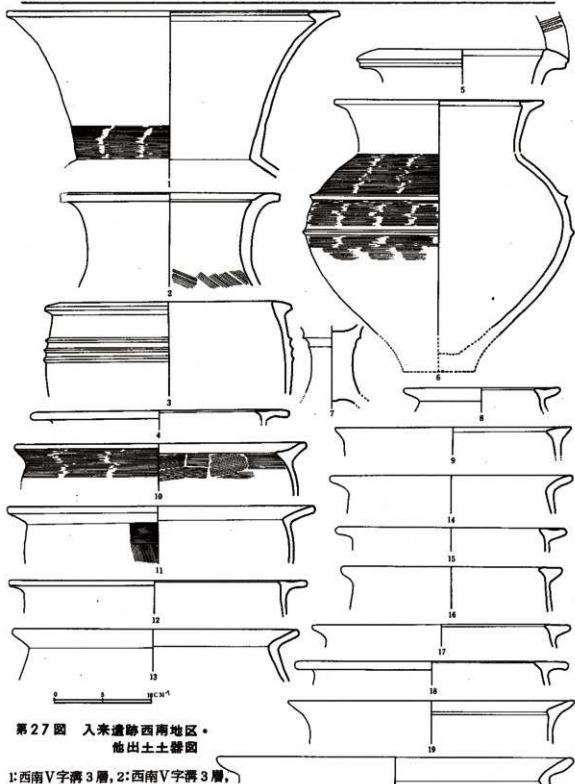
その他の土器 (第24図-9, 図版46-8)

柱状の土器で底部はわずかにひろがり、上げ底となっている。口縁部を欠くために器形は明瞭でない。現高18cm。



第26図 入来遺跡出土絡縄凸帯土器・他図

1: AII.1, 2: 関宅, 3: B.I.2, 4: 関宅, 5: B.I.1, 6: B.II.2, 7: GK.2, 8: GV.2,
9: GK.4, 10: GXI.2, 11: GII.2



第27圖 入來遺跡西南地区・
他出土土器図

1: 西南V字溝3層, 2: 西南V字溝3層,

3: 西南V字溝2層, 4: 西南V字溝2層, 5: 西南V字溝2層, ²⁰

6: 西南V字溝3層, 7: 西南V字溝2層, 8: 西南V字溝2層, 9: 西南V字溝2層, 10: B.I.1, 11: B.I.2,

12: B.I.1, 13: B.I.1, 14: B.I.1, 15: B.I.2, 16: B.O.1, 17: F.1, 18: B.II.2,

19: B.II.1, 20: 入來採集

3) 第3類土器 (第25図-1~19, 第27図-3・5, 図版38-4~8, 図版39-1~12, 図版40-1~4)

主として北東地区南斜面より出土し、北東地区台地のV字溝および、西南地区溝状遺構にも少量出土している。高橋貝塚出土の高橋3式(考古学集刊第3巻第2号)に大体該当するもので弥生時代中期中葉に比定される。完形土器が発見されておらず、器形も壺・甕以外はしられていない。形態から見て入来式の移行型式といえる。

壺形土器 (第25図-8・12~19, 第27図-5)

球形の胴部から頸部へ細まり、口縁部付近で再び外反し、口縁端は屈折して上面に幅広い平坦面をつくりやや下りとなる平底の壺である。胴部と頸部の境に2ないし8条の断面三角形の凸帯をめぐらす。色調は黄褐色を呈し、胎土にはかなり砂粒を混ぜ焼成は良好である。器面に磨きを施したのも見られる。

甕形土器 (第25図-1~6・9~11, 第27図-3)

胴部が著しく張り出して最大径が口縁部の径を超えるものと、口径より胴径の小さいものがある。口縁端は外方へ屈折して上面に平坦面をつくり、水平なものと外側へ傾斜したものがある。底部は充実した脚台となり底面の平坦なものと、わずかに上げ底となったものがある。文様は口縁下に1ないし8条の断面三角形の凸帯をめぐらし、凸帯の一部が垂れ下がった形状を示すものがある。焼成は良く、外面は暗褐色の色調を呈するものが多いが、内面は黄褐色ないし赭褐色である。大部分は輪襷み手法を用いるが、一部に巻上げの手法で作成されたものもみられる。刷毛目または磨きの手法で仕上げられたものもある。

4) 第4類土器 (第26図-1~6, 図版37-8~13, 図版38-1~8)

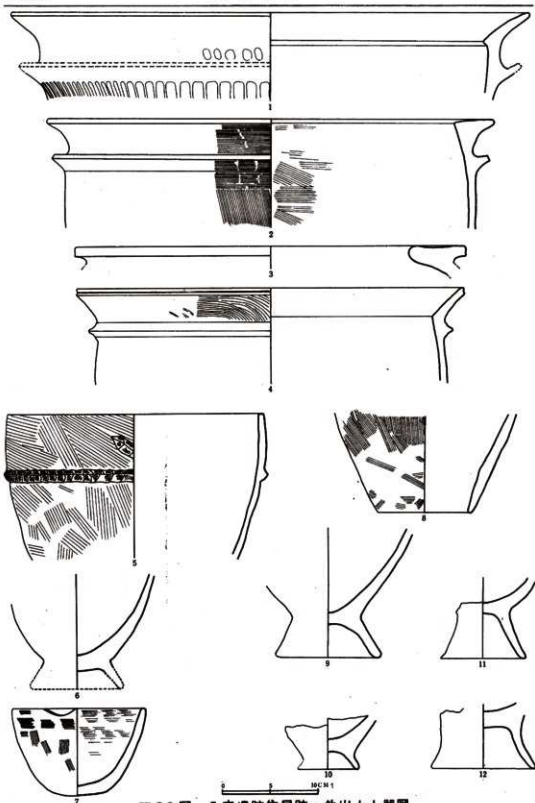
北東地区南斜面より出土する土器で、結縄凸帯をめぐらすのが特徴である。一ノ宮式(鹿兒島市一ノ宮遺跡出土土器)の祖形と見られ弥生時代中期中葉に比定される。結縄凸帯の発生については、すでに中期初頭の第2類の甕形土器に縦位の結縄凸帯が見られ(第28図-4)、また形成過程から見ると断面三角形の凸帯を器面に接着させる場合に、寛で押圧した結果生じたものであることを示す例(第26図-2~5)が発見されており、工作過程から発生した面もあるものと思われる。完形土器の発見がなく、器形では壺・甕が発見されている。

壺形土器 (第28図-1)

球形に近い胴部と、上方へ細くしめる頸部の接着部に2条の結縄凸帯をめぐらす。口縁部付近で外反し、口縁端は屈折して上面にやや幅の広い平坦面をつくり、外方へわずかに傾斜する器形で、平底の壺である。焼成は良好で、刷毛目仕上げの上をさらに磨きしている。色調は外面は暗褐色、内面は黄褐色を呈している。

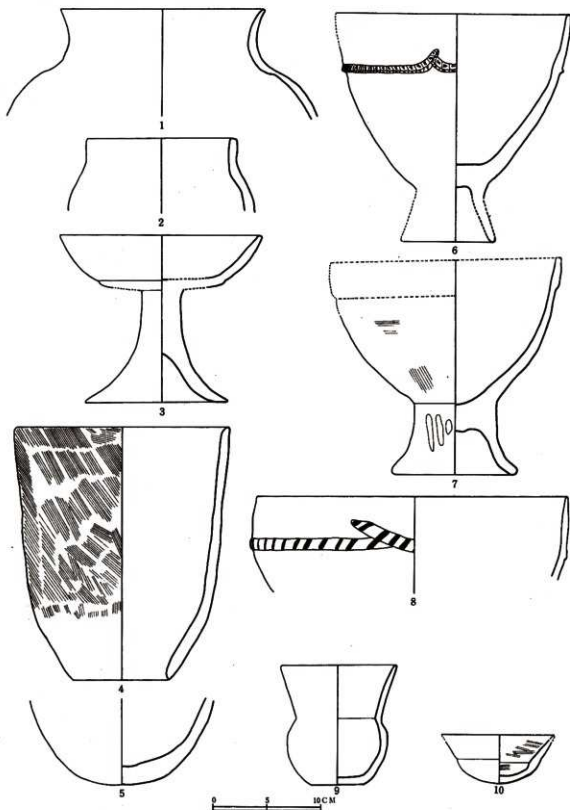
甕形土器 (第28図-2~6)

胴部の張り出した器形であるが、口径と胴部最大径がほぼ等しいものと、口径より胴部最大径が大きいものがある。口縁端は外側に粘土帯を接着して上面にやや幅広い平坦面をつくり、わずかに外傾して仕上っている。底部は充実した脚台で底面がわずかに上げ底となったものと、平坦なものが見られる。口縁下に3ないし4条の結縄凸帯をめぐらし、むすび目の表現部分で結縄凸帯を



第 28 圖 入來遺跡住居跡・他出土土器圖

1: B.II.1, 2: B.II.1, 3: 西南V字溝2層下部, 4: B.II.1, 5: H.I.2, 8号住居址,
6: H.I.2, 8号住居址, 7: H.I.2, 8号住居址, 8: B.I.2, 9: 6号住居址, 10: 6号住居址,
11: 6号住居址, 12: 6号住居址



第29図 入来遺跡6号住居址出土土器

下方に半円形を描いてたらしめたものもある。第3類土器との差異点は甕形土器の場合胴部の張り出しの強い点にも見られる。

5) 第5類土器 (第28図-5~12, 第29図-1~10, 図版40-6, 図版44-5~7)

遺跡全域の上層から出土する土器で、調査によって発見されたものは東北地区台地面の住居址出土の土器である。成川式にふくまれるがその中でも最も新しい部類に属するものと思われ、共存する須恵器がⅢA(第80図)であるところから実年代は6世紀中葉に属するものと思われる。

壺形土器 (第29図-1・2)

倒卵形の胴に直口またはやや外反する口縁部のつく器形で、丸底または小さな平底である。胎土は粒子が細かで、色調は黄褐色である。

小型壺形土器 (第29図-9)

胴のはった器体に、外びらきの頸部をつけた壺で、平底に終る器形である。良質の粘土を用いている。高さ11cm。

高杯形土器 (第29図-8)

浅い杯部に下部のひらいた長い脚部をつけたもので、杯部は、たいらな円板状の底と口縁部とのつぎ目に、明瞭な凹線をのこし、脚部は柱状である。胎土は砂をまじえない良質の粘土を用い、色調は黄褐色で研磨仕上げである。高さ15cm。

甕形土器 (第28図-5・11・12, 第29図-8)

上げ底の脚台に張りの少ないバケツ状の胴がつき、口縁部はわずかに内彎気味の器形である。輪つぎの跡が明瞭で口縁下のつぎ目に結縄凸帯を1条めぐらし、その結節点から凸帯の端が上向きに分岐するのが特徴である。器面は刷毛目仕上げで、色調は暗褐色である。

鉢形土器A(第29図-6・7)

高さ20cm内外である。碗状の胴に上げ底の脚台がつき、口縁部は直口である。口縁下に1条の結縄凸帯をめぐらすもの(6)と、口縁部に肥厚帯をめぐらすもの(7)とがある。結縄凸帯をめぐらすものは結び目が上方にはねあがっていて甕形土器と同様の構成を示している。

鉢形土器B (第28図-7, 第29図-10)

碗形丸底の鉢(第28図-7)、と丸底に外ひらきの口縁のついた浅鉢(第29図-10)とがある。

甕形土器 (第28図-8, 第29図-4)

無底の深鉢形甕で円筒形に近い。胎土は砂粒を多くまじえ、刷毛目仕上げである。高さ23cm。

6) その他の弥生式土器

本遺跡から出土する弥生式土器で以上の分類に属しないものが若干ある。数量は少なく且つ破片が主である。時期は前期から後期にわたり、中には他地域より移入されたと推定されるものもある。

A 前期の土器 (第26図-7~9, 図版87-1~4・6・7)

壺形土器 (第26図-7・9, 図版87-1~4・6・7)

頸部が上方へ細まり、口縁部で外反する器形で口縁部の内側と、胴部と頸部のつぎ目に断面三角の

凸帯をそれぞれ1条づつめぐらすもの(第26図-7)と、同様の器形で口縁部内面に小さな管を連続押圧して、重弧文、放射状文など施文したもの(第26図-9、図版37-1~4・7)、頸部と胴部の境に2条の沈線をめぐらし、その下に連点重弧文を施したもの(図版37-6)などがある。川内川流域でもこの種の土器の分布が見られる。

変形土器 (第26図-8)

胴径は口径より小さく、胴部のはりがみられない。口縁部は外彎し、口縁端の下腹に刻目を施し、口縁下には8条の沈線をめぐらし、この沈線内と口縁端を赤塗している。おそらく平底の甕であろう。胎土は多量の砂粒をふくみ、風化によって粒子が器面に浮きだしている。西瀬戸内系統であろう。

B 中期の土器 (第26図-10・11, 第27図-1・2・4・6・7~20, 図版46-1)

中期前半の土器 (第26図-10・11, 第27図-2)

壺形土器の外反した口縁部に、断面三角形の凸帯を内面に1~2条めぐらすもの(第26図-10, 第27図-2)、内面に2条、外面に1条めぐらすもの(第26図-11)などがある。

中期中葉の土器 (第27図-1・4・6~8・12・15~18)

主として西南地区の甕状遺構より出土し、北東地区南斜面でも検出されている。北九州の宝台Ⅰ式に該当するものと思われる。

壺形土器 (第27図-1・6)

胴が張り、最大径が中心よりやや上位にある胴部に、外反する頸部がつき、口縁部は筒形である。胴部中央に断面三角形の凸帯2条をやや広い間隔をもってめぐらしている。平底の壺形土器である。

高杯形土器 (第27図-7)

柱状部分が出土しているだけである。上部、下部を欠くが、杯部に近かく断面八角形の凸帯を2条めぐらすものである。

変形土器 (第27図-4・8・12・15~18)

口縁部の上面に平坦面をつくり、その面が水平か又は口縁端がやや下り気味となっている。

中期後半の土器 (第27図-9・10・11・13・14・19・20, 第28図-8)

主として北東地区南斜面に出土しているが、西南地区甕状遺構でも発見されている。須玖式土器に該当する。

変形土器 (第27図-9・10・11・13・14・19・20)

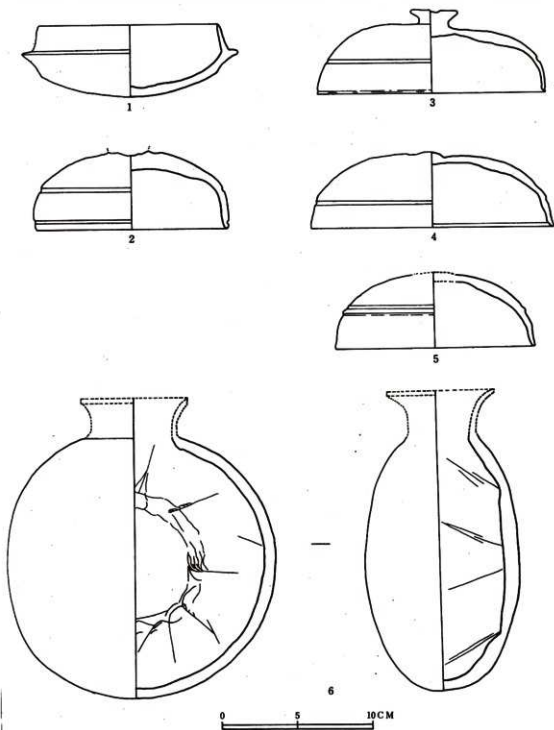
胴のはった器形で、口縁部が「く」字形に曲折した平底の変形土器である。

大型変形土器 (第28図-3)

西南地区甕状遺構より口縁部破片が出土している。口縁部は上面が平坦につくられ、頸部がしまり、胴部のいちじるしく張り出す器形である。合口甕棺として使用されたものである。

C 後期前半の土器 (第28図-1・2・4)

北東地区南斜面より出土している。三津永田Ⅱ式に該当する。



第30図 入来遺跡住居址出土須恵器図

1: 8号住居址, 2: XⅡ落ち込み, 3~6: 6号住居址

大型甕形土器

口縁部の上面は平坦となり、内側へ傾斜し、口縁直下に、頸部のくびれ部に密着して、断面三角形または台形の凸帯をめぐらす。合口甕棺として使用されたものである。

7) 須恵器 (第30図-1~6, 図版45-1~5・7)

北東地区台地の住居址内に成川式と共伴出土したが、1例(第30図-2)だけXトレンチⅡ区の落ち込み部分から出土した。

杯の身 (第30図-1)

8号住居址より出土したものである。立ち上りは1.7cm、最大径は14.4cm、器高は5cmの大形品である。底部は丸味を有する。様式はⅢaと思われる。

蓋 (第30図-3~5)

6号住居址より出土したものである。器高は5cm、最大径13~16cmである。天井部から肩部の傾斜変換線までの間に寛けずりの跡を残し、変換線に段を有し肩部から急傾斜して口縁部に終る。口縁端内側に段を有する。つまみを有するもの(第30図-3)も見られる。様式はⅢaに属する。

高杯 (第30図-2)

XトレンチⅡ区の落ち込み部より出土したものである。高杯の杯部と思われる。最大径18cm。

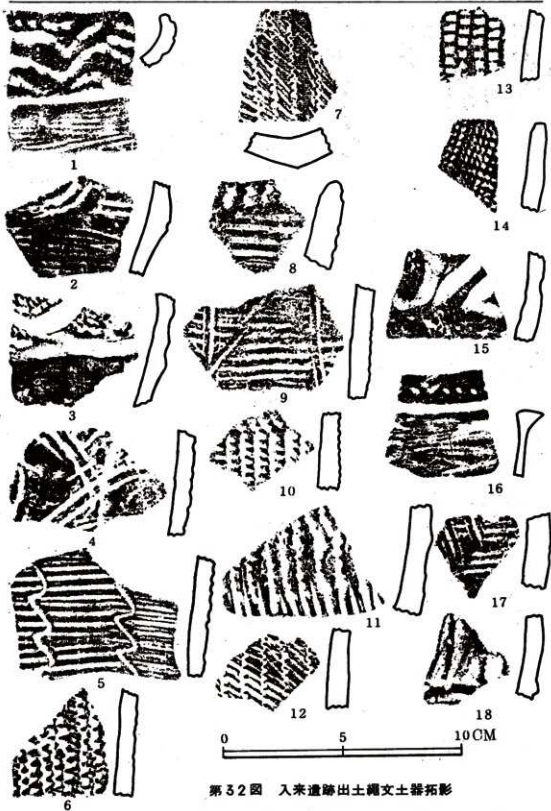
提瓶 (第30図-6)

6号住居址より出土したものである。口縁部を欠く。胴部最大径18cm。



第31圖 入來遺跡出土繩文式土器圖

1: B.I.1, 2: GXW.2, 3: 6号住居址, 4: GX表採, 5: GW.2, 6: GX.2, 7: GX.2



第32図 入来遺跡出土縄文土器拓影

- 1: GXX.2, 2: GXX.2, 3: GXIII.2, 4: LIII.2, 5: GXX.2, 6: AN.2, 7: AN.1,
 8: GXVII.4, 9: GXVII.2, 10: B.II, 11: B, 12: AV.2, 13: AN.2, 14: A, 15: GXIII.2
 16: GM.4, 17: GIII.2, 18: AN.2

8) 縄文式土器 (第31図-1~7, 第32図-1~18, 図版30-1~22)

北東地区の台地面および東南斜面の両方より出土している。弥生式土器に少量混在出土している。第3層の黄褐色土層に包含していたものを、弥生時代(6世紀の遺構を含む)に溝状遺構、貯蔵穴、住居址などを構築した際に掘り出したものと思われる。

A 前期の土器 (第31図-2・5~7, 第32図-1・2・5~14・17, 図版30-2・5・6・9~18・21)

前平式土器(第31図-7, 第32図-5~14, 図版30-9~18)

角筒形および円筒形平底の土器で、角筒形の土器では波状口縁も見られる。貝殻条痕文を横位または斜位に器面全体に地文として施文し、それに重ねて貝殻縁による押圧幾何学文(第32図-7・12)あるいは、同じく貝殻破片による波状文・幾何学文(第32図-5・9)など引き描きしている。口縁上面にはせまい平坦面を有し、外側縁縁に貝殻縁などによる刻目を施し(第32図-8, 図版30-12), 底部には同じく貝殻縁による縦位の条痕を施している。土器内面は砂粒があらわれ、痕痕が明瞭で、底部は厚いのが特徴である(第31図-7)。縄文時代前期前葉。

春日式土器(第31図-5・6, 第32図-1・2, 図版30-5・6)

器形はやや胴が張り頸部が盛かに締まり、口辺部は外反し、口縁部は再び内彎してキャリッパー形をなし、底部はあげ底である。バケツ状の器形も見られる。文様は地文に浅い貝殻条痕を施し、更に口縁部から胴部にかけて寛描きの凹線文、連点文を施文し、口縁部には粘土紐の貼付け文を加え、華麗な装飾効果をあげている。出土品は破片で全容をうかがうことができないが、貝殻条痕・寛描き凹線文などにその特徴を見ることができる。縄文時代前期終末。

凸帯文土器(第31図-2, 第32図-18, 図版30-2・21・22)

刻目凸帯を施すもの(第31図-2, 図版30-2), 細隆帯を有するもの(第32図-18, 図版30-22), 貝殻痕を施すもの(図版30-21)である。縄文系統と思われる。縄文時代前期に属するものであろう。

B 中期の土器(第31図-4, 第32図-3・4・15, 図版30-3・7・8・19)

並木式土器(第32図-3・4, 図版30-7・8)

凹線文に瓜形文を配するもので、胎土に滑石を混ぜたものが多い。出土の2例共に滑石を含む。縄文時代中期前葉。

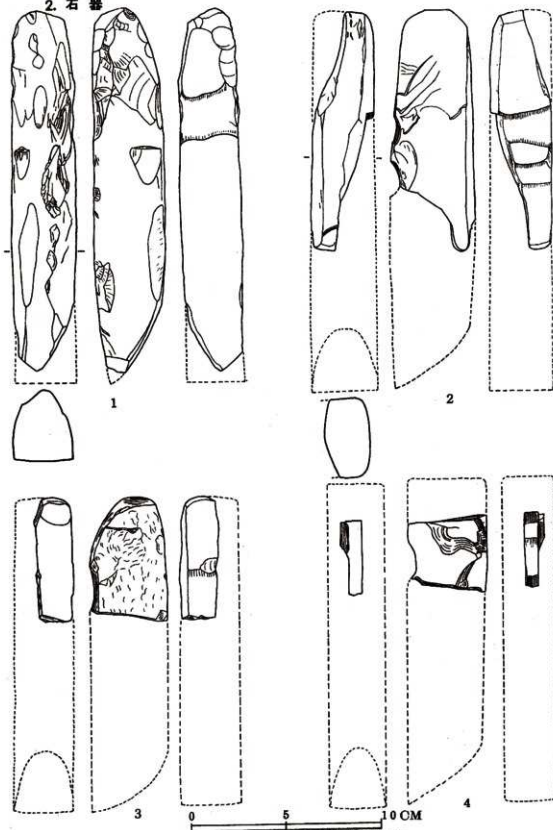
阿高式土器(第31図-4, 第32図-15, 図版30-3・19)

深鉢形平底の器形に胴部以上に太い凹線による曲線文を施すもので、胎土に滑石を混ぜたものが多い。第31図-4の土器は把手を有するものの1例と思われる。縄文時代中期中葉。

C 後期の土器(第31図-1・8, 図版30-1・4)

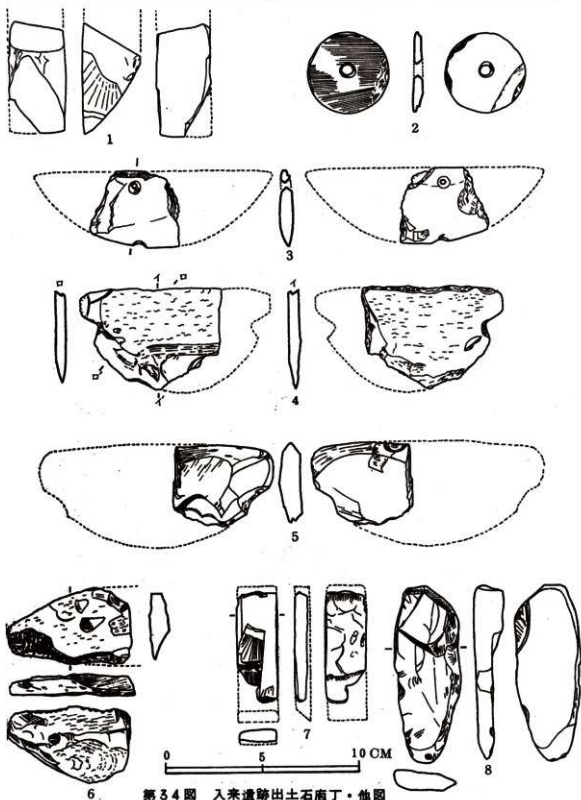
把手2例であるが、その1は大形で複雑な形態であり(第31図-1), 他の1例は簡単な凸起状のもので寛描きの沈線に連点を配した文様をもつもの(第31図-4)である。前者は縄文時代後期前葉、後者は後期後葉の草野式であろう。

2. 石器



第33圖 入来遺跡出土挾入石斧圖

1: GX.3~4, 2: GX.3~4, 3: H.I.2, 4: B. -125CM



第34圖 入来遺跡出土石庖丁・他図

1:G0.4, 2:GXX.2, 3:GXXIII.1, 4:東宅入口, 5:入来表採, 6:A試掘, 7:RII.1, 8:GX2

石鏃 (第39図-1~7・9~15, 図版36-6~20)

安山岩製(第39図-2~6・9~14, 図版36-8)12箇, 黒曜石製(第39図-1・7)2箇, 石英製(第39図-15)1箇の計15例である。形態は2等辺三角形で底辺が内彎するもの, 底辺および両辺が内彎するもの, 三辺が直線形のものおよび鈎葉形のもの4種類がある。第39図-1・4は剥片に加工したもので鏃の形に近いのでここにあげた。

石匙 (第38図-5, 図版36-21)

石英製の円形石匙である。長さ3.4cm, 幅2.6cm, 厚さ0.75cm, 6grの小形品で縄文時代に属するものであろう。

打製石斧 (第35図-4~6, 第36図-1~6, 第37図-1~4, 第38図-1~4, 図版31-13・17, 図版32-1~15)

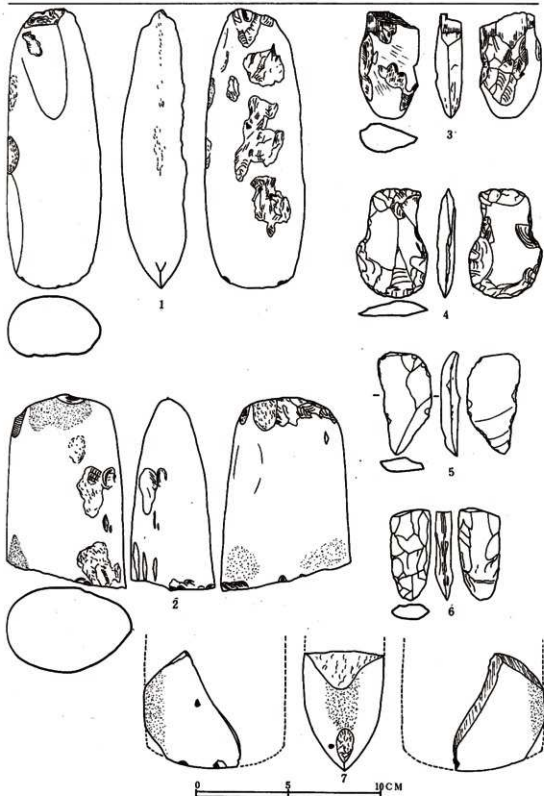
石材は頁岩(第35図-5, 第37図-4, 第38図-4)3箇, 砂岩(第35図-6, 第36図-3・6, 第37図-2)4箇の他はすべて安山岩(10箇)である。10gr~30gr台の小形(第35図-4・5・6, 第38図-3・4)で剥離片に加工したもの, 60gr~100gr台の中形(第36図-2・3・6, 第37図-4, 第38図-2)で剥離片に加工し, 扁平に仕上げたもの, 100gr~130gr台の中形(第36図-4・5, 第37図-1・3, 第38図-1)で自然の礫面または節理面を残して加工し扁平に仕上げたもの, 800grをこえる大形(第36図)で両面に加工し, 部厚く仕上げたものの4種類に分類することができる。これらの石器はそれぞれ種類によって機能も差異があったと思われる。以上にあげた他に第37図-2は折損したものであるが, 尖頭の利刃として使用されたものであろう。

磨製石斧 (第34図-8, 第35図-1~3・7, 図版31-12・14~16・18)

砂岩製(第35図-2・7)2箇, 頁岩製(第34図-8, 第35図-8)2箇, 片麻岩製(第35図-1)1箇の5例である。磨製蛤刃の完形品1箇, 残欠2箇と局部磨製の小形石斧2箇である。

片刃石斧 (第38図-1~4, 第34図-1・7, 図版31-2~4・7・9・11)

砂岩製(第38図-1~3, 第34図-1)4箇と頁岩製(第38図-4, 第34図-7)2箇の計6箇である。このうち第34図-7は欠損品であるがのみ形石斧と見られ, 他の5箇は挟入石斧である。完形品は第38図-1のみで, これも刃先が欠損した後逆の角度で刃を砥ぎだしている。第38図-2は挟入ヶ所が2ヶ所ある。



第35図 入来遺跡出土磨製石斧・他図

1: B.II.2, 2: G.K.2, 3: G.VII.4, 4: G.I.2, 5: Q.II.2, 6: L.II.2, 7: R.II.2

石砲丁 (第84図-3~5, 図版81-1・5・6)

第84図-3・5は頁岩, 4は安山岩製である。いずれも背は直線なし, 刃部は外彎している。第84図-3は両端を欠損し紐孔は2箇あるが一方はなかば欠けている。4・5は孔のかわりに両端に抉りのあるもので欠損品であるが一部に研磨した刃部を残している。

石鏃 (第84図-6, 図版81-8)

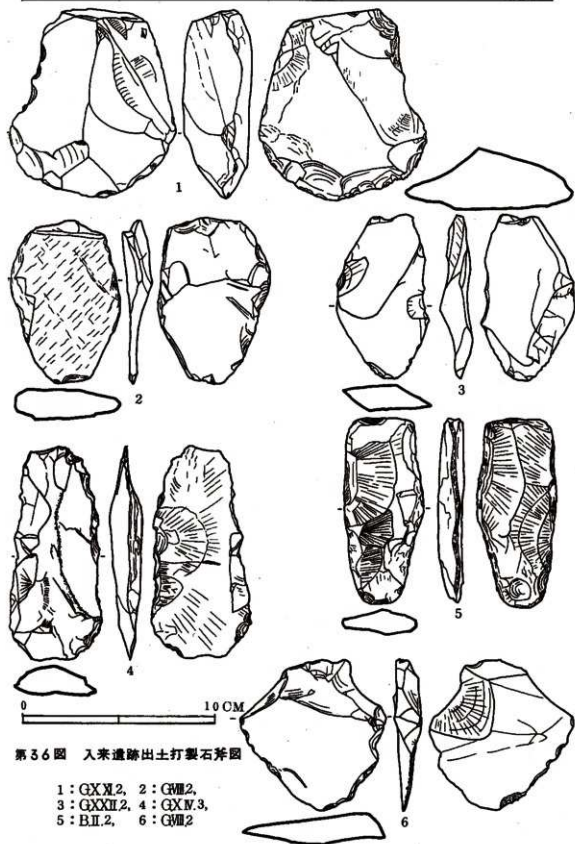
1箇出土した。安山岩製で打削によって形を整え, 刃部は研磨によって仕上げたものである。先端部のみ残存しているが使用痕がみられる。

磨製石鏃 (第89図-8, 図版86-5)

1箇出土した。頁岩製で長さ2.4cm, 幅1.42cm, 厚さ3.2mm, 重さ1.1grである。二等辺三角形で底辺は深く彎入し, 表面はよく研磨されている。底辺両端が折損している。

紡錘車 (第84図-2, 図版81-10)

1箇出土している。頁岩製で円形をなし, 径4.1cm, 厚さ5mm, 中央には両側より穿孔した孔があり, 径は6mmである。縁部・両面共に研磨されている。



第36圖 入來遺跡出土打製石斧圖

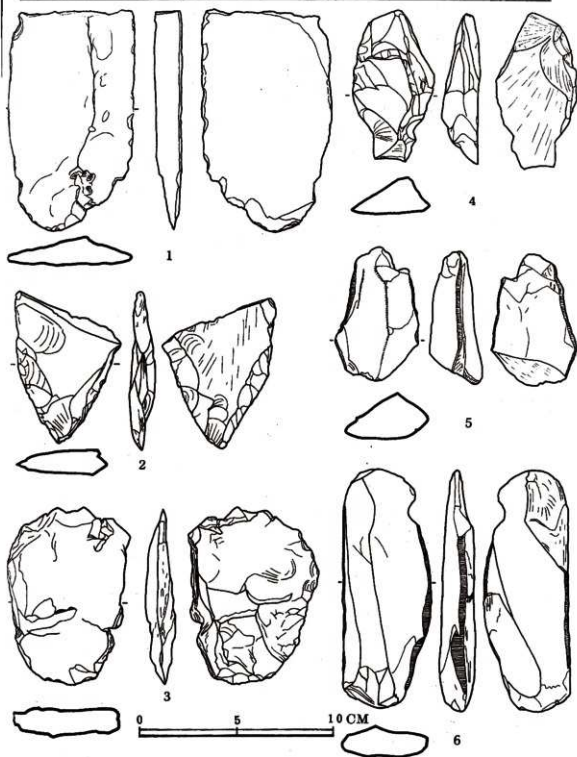
敲石 (第38図-6, 第48図-4~6, 図版33-2・8~10)

砂岩などを使用している。敲石としての用途だけのものと、他の目的で使用したものを後に敲石に転用したものがある。第48図-4の敲石は長さ10cm, 幅9.8cm, 厚さ5.2cm, 重さ600grの円礫を敲石として使用したもので、他の用途はなく、表裏両面と側面全体に使用痕が見られる。第38図-6の敲石は長さ13cm, 幅9.8cm, 厚さ5.2cm, 重さ762grの精円礫を使用したもので、両面と側面4ヶ所の計6ヶ所の使用痕があり、うち一面は深いくぼみができており、他の一面は全面に剝離痕があり、中央に敲打の痕が僅かに残っているが、剝離の目的は不明であるが敲石以外の用途のために加工されたものであろう。第48図-5は重さ280gr, 正面と上及び左右の4面を砥石として使用した後敲石として転用したものであり、第48図-6は重さ265grあり、石斧の折損したものを敲石として転用したものである。

砥石 (第42図-1~3, 第48図-1~3, 図版33-1~7, 図版36-3)

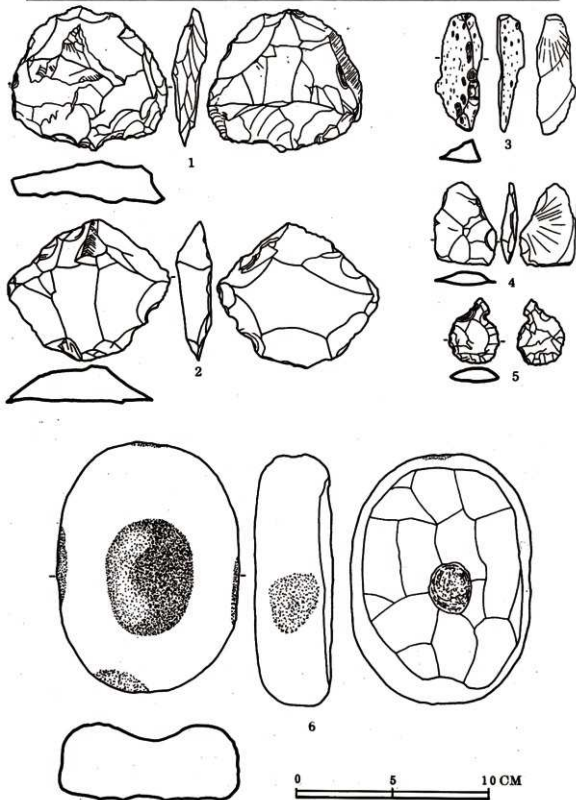
すべて砂岩製である。自然円礫を打割し適当な形に加工して使用したもの(第42図-2, 第48図-3)と、節理にしたがって割れたものを使用したもの(第42図-1・3, 第48図-1・2)とがある。一面のみ使用するもの1箇, 2面を使用するもの4箇, 四面または五面を使用するもの1箇で、重いもの(第42図-1・2)は固定して使用したものと思われ、小形で軽いものは手もちで使用したものであろう。使用面はおおかた凹面をなし、なかには溝状にくぼんだものもある。

以上の他に砥石として使用した後敲石として使用したもののあることは前に述べたとおりである。



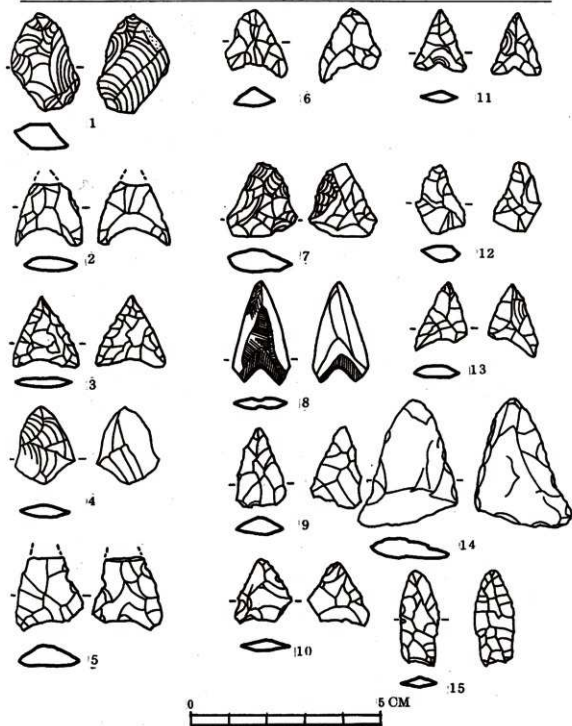
第37圖 入来遺跡出土石器・他図

1: A.V.2, 2: G.V.2, 3: B.II.1, 4: 入来西南V字溝2層, 5: G.M.4, 6: 高橋貝塚D.II.1



第38圖 入来遺跡出土石器圖

1:QV.2, 2:BI.1, 3:GI.2, 4:GI.2, 5:CIII.2, 6:西南V字溝2層



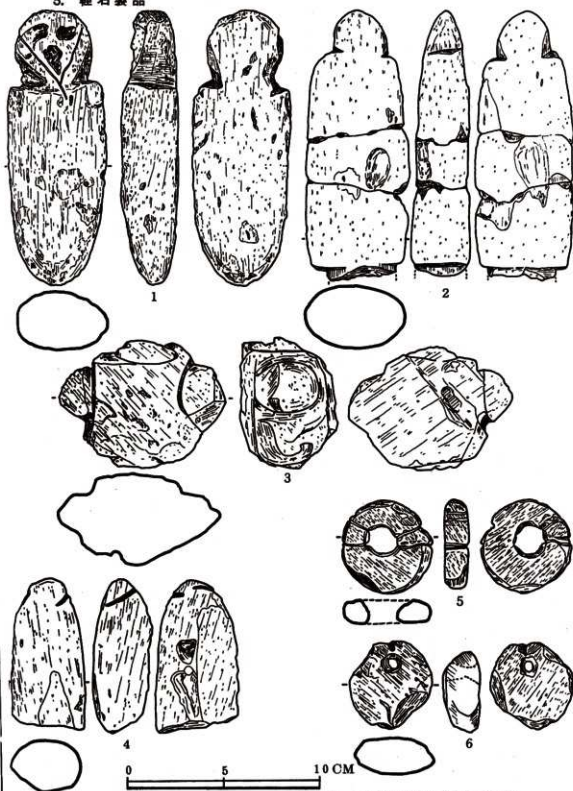
第39圖 入來遺跡出土石鏃圖

1: IⅢ.1, 2: LⅢ.2, 3: A'-70 CM, 4: GXⅤ.2, 5: 表採, 6: MN.2, 7: RⅢ.1,
8: GXⅡ.1, 9: 表採, 10: GK.3, 11: I.V.1, 12: I.I.2, 13: RⅡ.2, 14: BⅡ.1,
15: XVⅡ.2

特殊石器 (第87図-5・6, 図版86-1・2)

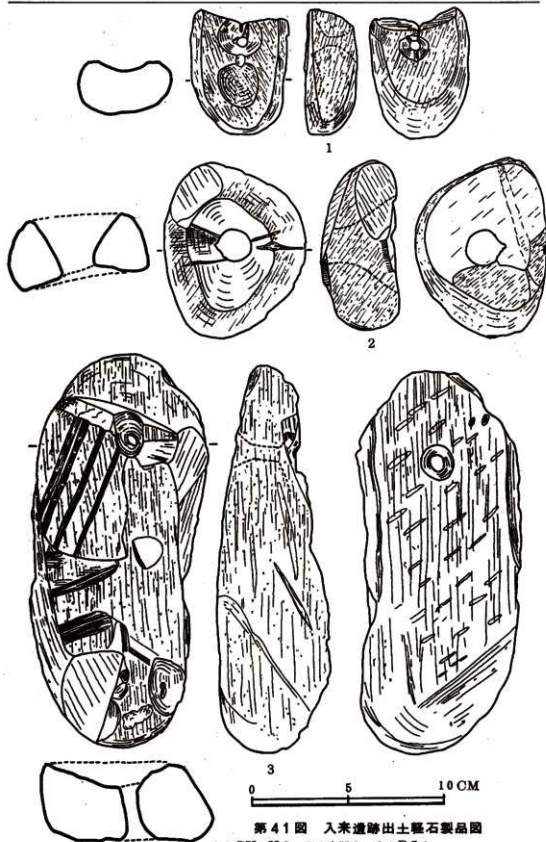
長さ7cm, 幅4.5cm, 厚さ2.4cm断面三角形の角礫である。石質は砂岩で三つの稜線に、縦横で磨蝕したような横位の人工的な条痕を有する石(第87図-5)である。第87図-6は高橋貝塚出土品で、同様な条痕を有するものであるが、この方は断面が楕円形の扁平な石で、一端には袈りが見られる。前者と同様の用途に使用されたものと思われ、共に弥生時代の特殊な目的に使用された特殊な工具であろうと思われる。

3. 輕石製品



第40圖 入来遺跡出土輕石製品圖

1: 西南V字溝2層, 2: GXN.2~XIII.2, 3: GK.4, 4: 西南V字溝, 5: GXVII.4, 6: 西南V字溝2層



第41圖 入来遺跡出土礫石製品圖

1: GK~X.2, 2: A.M.1, 3: B.I.1

入来遺跡には軽石を素材とする特殊な製品が見られる。南九州の縄文時代後晩期に見られる軽石製品との関連が考えられるもので、岩偶、石棒、垂飾等が出土している。

岩偶（第40図-1～3、図版34-2・4、図版35-8、グラビア）

第40図-1は西南部地区溝状遺構より出土した代表的なもので、長さ14cm、幅5.2cm、厚さ3.1cm、重さ50gr、灰白色を呈し多孔質の軽石製である。四肢を省略し、頭部と胴部より成る。頭部は顔面をV字状の沈刻線で囲い、目と口を彫りくぼめ鼻部は凸出している。縄文時代晩期の上加世田遺跡出土の軽石製岩偶が四肢を残す反面、顔面の表現が省略されているのに比較すると多少の差異があるが、大きさはほぼ同じで、全体から受ける印象にも類似したものがある。第40-2・3も同類のものと思われる。

石棒（第40図-4、図版34-8・5）

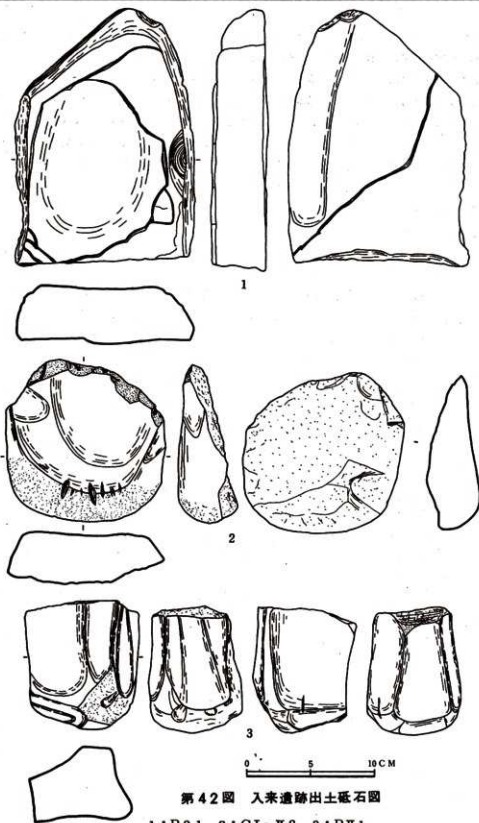
長さ8cm、幅4.2cm、厚さ3cm、重さ31gr、断面は精円形の灰白色軽石製で、先端に沈刻線をめぐらしたもので、上加世田遺跡出土のものと同類である。

垂飾（第40図-5・6、第41図-1～3、図版34-1・6・7、図版35-1・2）

軽石を環状に加工したものまたは、軽石礫に一孔を穿った加工品は、縄文時代、弥生時代を通じて多く見られ、漁網用の浮子または釣用浮標とする見方がある。鹿児島県内の各河川、海浜では、ほとんど軽石礫の分布が見られるが、この場合軽石礫は水底に沈んでいて、水面に浮いているものは極めて稀である。したがって軽石の浮力を利用する浮子または浮標としての用途は考えにくい。

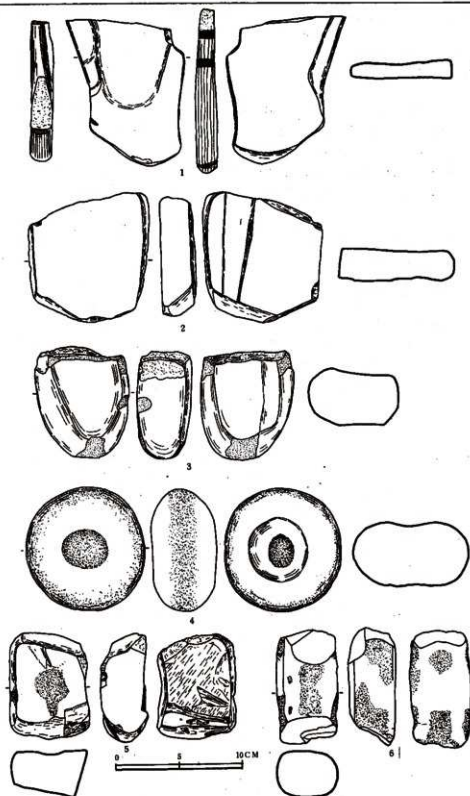
本遺跡出土の環状軽石製品または穿孔軽石礫には孔に紐を通して垂らしたもの（第40図-6、第41図-1）と、孔に紐を通して両側へ結束したもの（第40図-5、第41図-2・3）とがある。孔に紐を通して垂らしたものは、紐ずれの部分の真下に軽石礫の重心があって、垂らして使用したものとして推定される。市来貝塚の出土例でみると、人骨の腰部に密接して軽石製環が出土した例があり、生存中には腰にさげていたものと思われる。したがって本遺跡出土の例も垂飾と考えてよいものと思われる。

上加世田遺跡では軽石を素材として岩偶石棒などを製作し、これを呪術的に使用したところから、軽石そのものも重視して変形土器に入れて保存した例がみられる。本遺跡で出土した垂飾としての軽石礫も、むしろ飾というよりも呪術的な意味をもったものとしてよいように思われる。孔に紐を通して結束した軽石製品も同様な意味をもつものと思われ身体の一部に着装したものであろう。



第42圖 入来遺跡出土砥石圖

1: B0.1, 2: GI~II 2, 3: BII 1



第43図 入来遺跡出土砥石・叩石図

1:BI1, 2:BI1, 3:A.-60~70CM, 4:西南V字溝2層, 5:0N2, 6:GXII 2

Ⅶ 結 び

入来遺跡において現在までに行なわれた調査は遺跡のごく一部であり、その全貌を明らかにするために今後継続的な調査を行なうことが必要である。現在までの調査によって、台地上には弥生時代中期初頭の入来式を主とする遺構群と、従来成川式と呼ばれた土器型式の中で最も新しいと目される遺物（6世期中葉）の出土する遺構群の存在が明らかになり、更に台地南斜面においては弥生時代中期中葉の遺構ならびにその痕跡がしられ、西南地域には中期後葉の埋葬遺構の存在が推定された。

入来遺跡の調査で南九州の弥生時代中期初頭の土器型式がはじめて明らかになり、入来式と命名された。この土器は、前期の壺形土器に見られる頸部と胴部の境の沈線と同趣のものを、壺形土器の頸・胴の境並びに甕形土器の口縁下に施したもので、この他に甕形土器には縄文式の影響である刻目凸帯をめぐらすものもある。この型式は北九州との関連がつよく、福岡県亀ノ甲遺跡、熊本県西原遺跡に類形が見られるが、入来遺跡では甕形土器の底部が肥厚して脚台となっているのが特徴である。この甕形土器の器形は高橋8式等を径て山ノ口式、一ノ宮式などへ伝わり広く南九州に分布するに至っている。

中期中葉の土器は出土量が少ないが、この時期より以後には、北九州よりの土器の移入が見られ宝台1式、須玖式、三津永田Ⅱ式が出土しており、この中には甕棺の破片も見られ甕棺葬が行なわれていたことが推定される。またここでは従来弥生時代終末期とされていた成川式土器が須恵器と共存することが明らかとなり、底部に大きな一孔をもつ甕を共存するなど成川式の新しい種類は6世紀半ばまで下降することが明らかとなり、南九州における弥生時代後期の研究に一つの問題を提供することになった。